
銃殺姫

矢沢 一男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃殺姫

【Nコード】

N3735Q

【作者名】

矢沢 一男

【あらすじ】

二十世紀初頭、ある天才科学者が記憶のない少女を拾った。男はその少女の持つ機械に惹かれ、少女は運命に巻き込まれて、物語は動き始める。

物語は名は死の舞踏。選ばれた五人の 殺戮姫 による殺し合い。刻限は三月、それまでに勝たなければ待ち受けるのは死のみ。故に互いに食い合い殺しあう。

選ばれた五人、 吸血姫 、 毒殺姫 、 殺人姫 、 斬殺姫

そして科学者に拾われた少女 銃殺姫。さあ、殺し合いを始めよう。各々の思惑、野望、夢をぶつけ壊しあおう。一人は美を求め生娘の血を狙い、ある一人はただ純粹に殺戮を求め、またある一人は人助けを信条とするように。

そして、最も重なり合う矜持、互いに神の座へ上る執着にも似た信念を持つ二人の科学者が交差する。

プロローグ

時は二十世紀初頭、数え切れない程の激動があるであろう世紀の幕開け。ここから世界は大きく進んでいく事となる。

進歩と破壊を交互に織り交ぜながら新たな時代へと受け継がれる意思是、いつの日か自らの紡いだ物語へと形を変えていくだろう。

既に神々は不要となった故に、人は神なしでも生きていく事が出来ると宣言するために、人は物語を紡ぎ語り世界を凌駕する。

しからば語るのは、超越の物語。神へ至る道　ロード　を駆け上がる物語を作り出す、荒唐無稽な御伽噺。

誰が神を超える人間を作り出そう言うのか？　一体どの誰が機構のブリキから魂を作りだ出すと言うのか？

両者は共に神に至る道。片や自らが作り出す生物を以て既存の神を凌駕し、片や自らが器を作り魂までも作り出すという神に勝る技量を以て自身を神の領域へ上る。

片や人は神の喰らう事で駆け上がる神殺しを肯定し、片や神に作られた己たちが新たな存在を作り出す事こそ存在意義とする。

二つは互いに矛盾する。人間は今だ完成されていない故に上を目指し、人は既に完成しているが故に新たに下に存在を作り出す。

人は完成しているのか、いないのか？　ただ、それだけの話。されど二つの意見の根底にある感情は同じだった。

そしてその感情とは、『人はかくも美しい』この一文に集約される。

果たしてそれはいつだっただろうか？ 奇妙な魔術師がくだらない誇大妄想を語った時だろうか？

分らない。ただ、動機はやはり魔術師の言葉だろう。なぜかその妄言がありえないと否定できなくて、その事をいつも感じていたような気がして、信じる以外に道は残されていなかった。

曰く『世界には神がいる』 曰く『その神を凌駕する術がある』

何時からか、常々思っていた。人間は、どこに行くのだろう？
いや、どこに行き着くべきなのか？

だが、どのように湾曲した答えであろうとその方向性は決まっている。滅びの道などありえない。ならば、進むべきは上しかない。故に私の答えは『進化』すること。どこまでも、どこまでも。その際限がどこなのか？

しかし、そのような事誰一人として分からないだろう。ならば一度、神に上り詰めてから、それを考え始めればよい。

『ならば、神を越える手段を私が用意しよう』

そのために魔術師が私に与えたものは、秘術でも奇跡でもなかった。天に上がるには踏み台がなくてはならない。ならば、与えられたのはその未知の世界に踏み込む為の通貨。天に至る資格は神である事、故にその高みに上がるためには神を参考にするべきだ。そうつまり、払うべき通貨とは神の骸に他ならない。

それは一つ一つは小さな部位ではあるが、その数は数十にもなった。それをどこから手に入れたのかは魔術師が答えた事はない。いや、知る必要がないから私が質問をしなかったからなのかもしれないが。

ただ、それを以て創り上げた。

都合四体。神の血肉を持った魂喰らいの超越種――美しき 殺戮姫達。加えて一つ魔術師たる彼が用意したもう一人、すべての火種となる戦乙女を以てこの死の舞踏開幕する。ダンスマカブル

五人の女神。 吸血姫、 毒殺姫、 殺人姫、 斬殺姫

そして 銃殺姫。さあ、頂上の決戦を始めよう。喰らい上れ、神の座に届くほどの魂になれば神に似せられて創られたその身体も神の領域までたどり着く。

止めれるものなら止めてみるがいい世界の調律者 セブン・ゲート、我々人間は此処まで来た。

「人はかくも美しい。故にその身は神に成り代わり、神を超越するべきだ」

邂逅——そして物語が動き出す

その場所は、清潔感の一欠けらもない豚小屋のような場所だった。イースト・エンドに存在するようできて完全に孤立した独自のルールで回っている黙認地域。有体に言えば吹き溜まり、最大限に褒めるならば外れ者の楽園。政府に軍、その他諸々からも黙認され、ここならば幾ら犯罪をしようと問題がない、そのように囁かれるほどの無秩序。だが、外れ者達にはこの場所が必要だった。誰もがその由を理解できる迫害されるべき人間達。殺人狂、黒ミサを行うカルト集団、そして余りにも理不尽に進んだ知能を持つ科学者、その様な外れ者が集まってくる場所。

そしてその街の住人であり外れ者の一人にヴィンセント・フィッツモリスという男が居た。またの名を 天才機構学士。その操る《機構》は機械にあらず。機械の更に上の領域、機械が物理法則の中で働くなら、彼の《機構》はこの世の法則の中で働く。それはこの時代の機械の域を軽く千年は抜いていた。

故にそのような物を作り出せるものがまともな筈がない。その思想、その目的、その行動は常人には歪すぎた。そうして人々から恐れられた彼は今この街に流れてきたのだった。

しかし、彼はそのようなこと少しも気にかけず絶えず自問自答を繰り返す。

人は何所に行くべきなのか？ 退化などありえない。ならば、進化するべきだ。だが、彼はそれを完全に否定した。人間が進化して良い筈がない。いや、進化できる筈がない、と。彼曰く、人は完成されている。人はその進化の究極地点。なぜなら、これほど美しい人間が完成していないなど誰に言わせよう。いや、誰も言えない筈だ。そのような思想の人間は滅ぶ他ない。まして、人の身をを神に近づけて退化させようなど、是非が是非でも止めてやろう。そう、

神は人間を作り出した。生命を作り出すその術、素晴らしいとしか言いようがない。だが、それは神以外にも持つ者がいる。

人間だ。

人は生命を生み出す。その魂を神の元から拝借し、新たな人間を作り出していく。ならば、人間が次に歩むべき事は何か？ それは、一つしかない。神を超えるには、神の御業を超える必要がある。

「人はかくも美しい。その肉体は既に完成されているが故に魂までも無から生み出す究極の器を創り上げるべきだ」

それが、彼が科した矜持であり、最も彼が願う思い。

《機構》を持って魂の宿る生き物を作り出す。神ですら出来なかった難問。自ら行なえばそれは神へと至る道となり神の領域に踏み込む。いや、超越するだろう。

その思想は崇高。目指す物に必要な能力も段違いに高い為、彼自身の能力もまた破格だ。だが、この街で生きる彼は今日生きる事に手一杯の状態であった。

「なかなか上手くいかないものだな。人生つてのは」

手始めに技術力と資金を獲得するために、常人に理解できるレベルに抑えた機械を金持ちの屋敷やマフィア共に売りつけ、《機構》という名の兵器を世界の暗部に流していた。そのため獲得した資金の総額はそれなりに上るだろう。だが、一つの《機構》を作るに掛かる費用は莫大。消費と供給が追いかけてこを行い。十年近くの期間を経てようやく、第二段階に漕ぎ着けた所だった。

既に創り上げたのは、魂の器。人間で例えるなら脳味噌に当たる。機能としては問題がないが体がなく不完全でもある。人ならば体全体を持って魂の入れ物となすが、資金面の都合でこうなったのは聊いささ

が科学者としてどうか。それよりも食事をどう切り詰めるのかそれが重要だ。

そのような事を考える彼は、壮大な思想を持ちながらも今は現実に生きる人間であった。そう、今はまだ。

薄暗い夜道。メインストリートではなく、小汚く狭い路地。いつもの帰り道であるその場所で彼の運命をは動き始めていく。

目に入ったのは、布に包まれた何か。徐々に近づいて行くと人が蹲っているのだと理解した。服の類は一切つけていない。ただ、布を纏っただけの少女。

「お前、此処で何してる？」

一人身の娼婦と言うにはまだ年齢は足りていない。だが、何も持たない少女がのうのうと暮らせる程この街が甘い所ではないのは事実だ。ならば、逃げてきたのだろうか。人攫いか、それとも都市の方でヘマをやらかしたのか。どちらにしろ、助けてやる義理はない。「分からない。記憶が……ないの」

記憶がないと言い張る少女。普通の場所なら、疑問を感じ耳を疑うだろう。だが、この街での話なら別だ。薬か何かを飲まされたなど、原因は数え切れない。それに近頃、様々な新種の薬が出回っていると聞く。だから、この程度の話に気に止める必要はない。そう判断して、この場を立ち去ろうと彼は決めた。

「もうちょっと、マシな話が聞けるかと思ったが。現実、こんな物か」

興味深い内容なら気分を入れ替えられ、行き詰まりかけている研究の足しになるならば行幸、そのような期待は少なからずあった。いや、そのようなものがあると感じたのか？ どちらにしろ何度か聞いたような話らしい。期待はずれだ。

「ねえ、私の記憶知らない？」

被っていた布から顔を見上げてこちらを覗いて来る。赤みを帯び

た髪に中世的な顔立ち。しかしまだ歳の若い顔は、凜々しいとは言えず可愛らしいという印象を受ける。大人になっても、今のままでも需要がある。このような無秩序な街なら尚更だ。

「俺が知るわけないだろう」

彼の言葉が聞こえなかったのか、少女は少しも動じずに纏っている布の中を探り出した。

「これ」

少女が手から出したのは時計。しかし、見た事もないような変わった形をしていた。

「これだけ、私は持っていたの。何なのか知らない？」

ただの時計。そう、ただの時計だ。取るに足らない。見る価値もない。機械を超えた《機構》を操る自分にとってどうでもいいはずなのに――。

手が伸びた。耐え難い何かの魔力に引かれ、少女の手の平へ手が向かっていった。少女の柔らかい肌を感じ、その時計を受け取る。

「これは」

紛れもない。これには《機構》が使われている。微細で繊細《機構》がもたらす極小の世界法則の変化。有象無象の輩には到底理解できないそれが、手の平から伝わってきた。

「オイ、お前。これを何所で手に入れた！」

分かるはずがない。むしろ、この少女の方が聞きたいのだろう。そしてこの時既にヴィンセントは気が変わっていた。

助ける義理が出来た。この世の大半はギブアンドテイク、必要があれば何かを与え、与えてもらう。この少女はこの《機構》の持ち主への鍵になる。それだけで助ける理由としては十分だ。

「そうだな、記憶がない。だったか、お前？」

「うん、分からない。それで私の名前は……」

「そいつも忘れてる訳か」

「……そうみたい」

「お前の持っていたコイツ。俺はコイツを作った奴を見つけ出した

い。そいつは、まあ、お前の記憶の手掛かりを探すのと同じように変わるだろう？」

「うん」

「だから、付いて来るか？ 行く場所もその様子じゃないんだろう？ 食い物と安全ぐらいは用意できる。もっとも、俺を信用するしかないかが重要だがな」

彼の家はそこらにある家とは違う。厳重なロックと高度な認識システムを兼ね備えた時代を流れを通り越している代物だった。

「安全……安全、安全な方が私もいい。それにあなたは怖くなさそうだから大丈夫。たぶん、嘘もついてなさそうだし」

安全だという事を強調するように呟く少女。無意識下に刻まれた恐怖的な体験でもあるのかも知れない。どちらにしろ、少女はヴィンセントに付いて行く事を決意した事に変わりなかった。

「俺は、ヴィンセント。天才機構学士 ヴィンセント・フィッツモリスだ」

「うん」

今度は恐る恐るではない。両者、はつきりとした意思を持ちながら、手を伸ばした。少女の手が彼の手を握り、彼の手が少女の手を握る。硬く、硬く結びついた絆。どこまでも続く絆がこの瞬間生まれたのだった。

謎の少女

十代、それも裸の少女を家まで連れて歩くこの状況を周りの人間は気にしていなかった。見ているとしてもヴィンセントがこの様な少女を連れているという物珍しい状況を見て驚いている人間だけである。理由は単純に見慣れているからだ。そう、ここはそういう街。この街の住人から見れば奴隷や身売りは当たり前、日常茶飯事と呼ぶべき出来事だからだ。

ようやく視認できる距離に目的の建物が見えて来る。外れの街、名こそないが通称『掃き溜め』。イースト・エンド最深部とも呼ばれるあらゆる無法の黙認地域だ。この場所はその最外部にかなり近い場所にあたる。この場所はまともな地域に近すぎるため、中心部で好き勝手やっている連中もここでは大っぴらに悪さを出来ない。だが、安全かと問われれば誰であろうと、こう口にするだろう「あれほど危険な場所はない」と。まともな流通が成り立つ地域に近い事は立地条件が格段にいい事でもある。

理由としては街の中に存在する商品の価値と外に存在する商品の価値に差が着き過ぎているからだ。身売り、奴隷が日常であるように薬に臓器と本来高価な物が通常より安く、逆に食料や家具などの極一般的なものが高騰している。

となると街の最外部は、その気になれば他の街で簡単に必要な物資を手に入れられ、中で捌けば非合法な商品と物々交換で簡単に手に入る場所だ。結論を出すとこの土地の競争率は群を抜いている、つまり当然大規模な組織が殆ど占領しているため、一匹狼がどう立ち向かおうが死を免れない。そのような場所だった。

「ここだ」

「ここが、あなたの家？」

目の前に広がる建物は、この通りにある豪邸のどれよりも大きい。

まず敷地の大きさから違う。実際、豪邸と言える広さではないが、この狭い隔離地域にしてみれば破格の大きさ。加え、左右の土地も買い上げ、両側には何も立てられていない。何かも異質。しかし、ここがヴィンセント・フィッツモーリスの寢床だった。

「家つっより、研究施設って言った方がいいかもな」

「そう」

少女が気の抜けた声で相槌を打つ。どうやら、目の前の建物に気を飲まれているようであった。

そして家に着く。外観は一般的な住居と比較しても変わりはない。「お前。ちょっと危ないから、ここでじっとしてろよ」

少女は首を傾げるが、ヴィンセントはそのまま家の敷居を跨ぐ。そして、内部の何かを操作した。

それと同時に大気が揺れる。少女もそれを感じ取っていた。張り詰めていた空気。それが一瞬で霧散していく。

「何？」

「結界を解除した。詳しい説明は後でするから早くこっち来い」

「……うん」

納得しない様子であったが、ヴィンセントは納得させるつもりはなかった。今はその時ではないし、現状決めなければこの少女をどうやって扱うかだ。

恐る恐ると家の中に入っていく少女。この少女をどうするか。早急にやるべき事は、衣服を着せる事だろう。しかし、生憎婦女子用の服はない。頼れそうなのは唯一の女友達ぐらいか。そう考えて、ヴィンセントは重大な事に気がついた。

「やばいな、アイツが来てるの忘れてた」

そのまま少女を連れて、家の中を進む。一階には完成した《器》が占領しており、二階には創り上げた《機構》が占領している。つまり、二人は三階への階段を上り、唯一生活スペースと研究室が同

居している異空間に足を踏み入れた。

「記憶を失っているから、判断つかなくて言っていなかったけど。この家って絶対普通じゃないよね？」

少女が堪え切れなかったようで、遂に口を開いた。

「まーな」

そして、その声を聞いた女が一人。

「あれ、ヴァインセント帰って来たの？ それよりさ、さっき女の子みたいな声が聞こえたんだけど私の気のせい？」

研究室から女が出てきたが、ヴァインセントは沈黙を続ける。

女は真つ先に少女の方を見つめると、ヴァインセントの方に向き直る。嫌な物を見る目つき。そして嘲笑の意味を込めて口元を歪め、口を開いた。

「なにそれ、アンタが女連れてるって……人体実験でもするつもりなの。流石にそれは私も引くわよ」

研究室の方から出てきた女の視線が、再び少女に向けられる。少女の格好を考えると、どこぞの市場で買ってきたと考えるのが妥当だろう。

「ヴァインセント、誰？」

面倒な事になったとヴァインセントは後悔した。つい、少女が持っていた《機構》に浮かれて、この状況を想定できなかった自分のミスに違いない。

別に害はないのだが、やはり鬱陶しいことこの上ない。

「勝手に言ってる。俺は俺の事情があって、コイツを連れ帰ったのであってな」

女が肩を小刻みに震わし、耐え切れなくなった大笑いして。

「あはは、アンタ、そういう趣味だったの。言い訳って男らしくないわよ」

それをヴァインセントは軽く流す。これ以上の弁解する気も無く、

したところで状況が好転することなどありえないからだ。

「へー、弁解しないんだ」

「妥当だろ。電波受信してる奴に言われたところで、俺が態度を改めると思うのか？」

「人間社会に適合できなかった社会的屑の癖によく言うよ」

「お前もだろ」

「私？ 違うわよ、私は適合できなかったのではなく、適合しない道を選んだの」

「そうか、あえて屑になったと。相当なマゾヒストだな、鞭かなんかで縛ってやるうか？」

「やっぱり、そういう趣味な訳。と言うよりも、今まで散々人間の女に興味はないって言ってたかった。その子が精巧なダッチワイフだとか言う冗談はやめてよ」

勢いよく指を突き出し、二人のやり取りを眺めている少女を指差した。

「私？」

「気にしないでいいぞ。こいつキ。ガイなんだ。人間と物の区別がつかないらしい」

「おい、ちよつと待て。誰が。チガイよ」

「お前以外に誰がいる」

女の顔が引きつった笑みを浮かべる。

「アンタって奴は、毎度毎度、人を何所までバカにすれば——ッ」
押し殺したような声で女は抗議する。

しかし、どちらも仲が悪いようには見えなかった。

少女は手持ちの服で着れそうな物を見繕い着させた所で寝てしまった。時刻は既に十二時を切っているので年齢を考慮すれば妥当だろう。

「で、あの子は何？」

我が物顔でテーブルにつく女。名前はアルウィーン・レイヴアース。ヴィンセントにとってこの街で唯一の交友関係のある人物だった。容姿は何所にも居そうだが、動きやすいように女らしい服装は好まないと風変わりである。職業は盗賊紛いであり、盗みを主にこなっている。金がない訳ではない。単なる暇つぶしとしてやっているそう。正直、取られた人間には堪ったものじゃないだろう。「どうやら記憶がないらしい。行く所もなく路地にいるのを発見して連れ帰ってきた。一応、ちゃんと確認は取ったぞ」

「ふーん」

信じていない目つきでアルウィーンは、ヴィンセントを見る。

「アンタが人助けね。助けたからには、最後まで面倒見るんだろけど。やっぱり、動機がないんじゃない。アンタの場合、記憶がない少女なんか見つけても、こういう奴時々いるな、って思いつつ放置する人間だと思ってたけど」

「よく分かっていらっしやる。理由はコイツだよ」

そう言つて、少女が持っていた唯一の物を投げる。それを受け取ったアルウィーンは、じつとそれを見つめた。

「時計？」

針がついていないが、この形状に一番近く実用性のあるものに絞るとそれ以外は考えられない。

「でも、針がない。それに時計として必要な所が何もないんじゃない？」

「そうだ。それ、俺の創っている《機構》の同類だ。詳しく調べていないから分らないが、俺と同じで機械の中に法則に干渉させる装置を付けることを考えた奴がいるらしい」

「はあ！？ アンタと同じ馬鹿みたいな事やらかす奴がいたところ？」

「何だ。そのありえないって顔は」

「あんたね。魔法やら奇跡やらで、不思議現象起こす輩ならともか

く。誰でも使える機械で、不思議現象起こそうとするのは普通アンタぐらいしかないと思うわよ」

「もついいだろ。諸々の事情は記憶が戻ってから聞けばいい。それに用事があるんだったら早く言ってくれ。俺はすぐにそいつを解析したいんだ」

興奮気味のヴィンセントを嗜めるようにアルウィーンが答える。

「だとしても、ちゃんと聞いてよね」

「了解だ」

三階に唯一置いてあるテーブル。そこに対面するように座る男女が二人。

「調べたい欲しいのは、前にも言った最近かなり出回っている毒物の事ね。知る限り毒の種類は三十種ぐらい」

「具体的には？」

「死ぬ時刻を一分単位で指定できる奴。それが形状、液体とか固体とか粉末とかで五種類以上あるわ。他にも、痺れ薬や媚薬などオーソドックスなものから、筋肉を異常に強くしたり、記憶を消したり、相手を催眠状態にさせたりするヤバイものもある。アンタの創ってる物と同じぐらい出鱈目ね」

「そいつが出回ってる。別にいいじゃねーか、ここの屑どもが幾ら死のうとどうでもいいだろ。俺もお前もそんなに聖人様じゃねーんだから」

アルウィーンも善人ではない。そもそも、この街で生活している人間が善行とは何なのかを知っているのかも怪しい。

「ダメダメ、それがさ街の外に広まっちゃってるのよ。貴族とかも手に入れてんじゃないか、って殆ど確信に近い噂も聞いているわ」

「その不祥事が発覚して、政府がここに介入してくるのが困ると」

「そう、ここなくなったら盗み出来ないし」

「よそ行け」

「別に社会的ゴミ屑から物をとつてもいいけど、真つ当な人生を生きている人から取ったら気分悪くなるじゃない」

おお、何と言う自己中心的な回答だろう。

「でも、そんな奴等すぐ見つかるだろう」

「奴等っていうより、これ一人が全部やっているらしい。だから、私一人では荷が重そうだなあって」

三十種類に及ぶ薬物を調合しながら、この街でかなりの量をばら撒いているのが一人。笑い飛ばしたくなる人数だ。

だが、自分が同じ事を出来るか聞かれれば、簡単に出来ると言えるだろう。つまり、天才的な才覚を持った人物なら出来る。案外、少女が持っていた《機構》を創った奴が犯人なのかもしれない。

「色々黒い噂が絶えないのよ、特に最近は。娼婦の子宮やら臓器やらを恐ろしく丁寧に切り取って殺した殺人鬼だつて捕まつてないし。何所の切り裂きジャックかつてのよ。他にも行方不明者も多いみたいだし」

「愚痴ならどこかでやってくれ。もう俺は知らん」

「で、今回の件はどうするの？」

「その話は、相応の金を払ってくれるなら、一ヶ月以内にどうにかしてやる」

「交渉成立ね。取りあえず、盗んだ金と宝石とじゃ、どっちがいい？」

「そうだな。金は必要だが、宝石か……悪くないな」

宝石は《機構》の部品や回路として役に立たない。しかし、魔術等の必須アイテムの為、どうしても作業短縮の為必要になってくる。「現物支給で頼む」

「了解。じゃあ、そういう契約つて事で」

そう言つてアルウィーンは立ち上がった。そして、そのまま階段に向かつていく。

「それじゃ、私ここに居てもすることないし。帰る事にするわ」

しかし、突然アルウィーンが立ち止まり――

「ああ、そうそう。あの年の少女困っているなんて、正直、世間体気にしたらヤバイわよ」

そう言つて、アルウィーンは階段を下りて、研究所を出て行つた。「世間体ね。この街に無い物気にしたつてどうにもならないのにな」人身売買などこの街では当たり前のように行なわれている。しかも、あの少女よりも年下の年齢でもだ。

「しかし、危険なのは変わりないか」

そう考えて、あの少女に着せる服が決まつた。アルウィーンに見繕つてもらふと思つていたが、どうやらその必要はなさそうだ。

――翌日

「イヤ」

「年上にはもう少し敬意を払へよ、ガキ」

「イヤです」

ベットの上でシートに包まれている少女が、明らかに不満そうな顔でヴィンセントを見つめていた。そして、時々差し出された衣服に目を移し――

「これ男物？」

「俺のささやかな願望だ。女子供になんかに俺の仕事場に立ち入らせたくないからな」

「自分勝手」

「まーな、それくらいじゃないとやって行けないのが人生って奴だ。それと敬語使え」

「自分勝手ですね」

「絶対俺に喧嘩売ってるだろう、お前」

ヴィンセントは少女を睨みつけるが、事態は一向に好転せず膠着状態が続くと思われた。

「お腹すいた」

少女の声が事態を揺るがした。主にヴィンセントの心情を、それはもう完膚なきまでに。

「悪いが、俺は結構ムカついてるんだ。ああ、確かにお前を拾ったのは俺だろうよ。まあ、俺がある程度世話する必要があるってのも保護したんだから当然だ。だから、俺ももう怒るつもりはない。だから、これだけは着ろ」

「イヤ」

次の瞬間ヴィンセントの右手が少女のシーツを剥ぎ取った。少女の傷一つなくまるで生まれたての様な肌が現れる。

「うわっ」

しかし、ヴィンセントがその事に目を奪われる筈がなく。左手で少女のこめかみを拘束した。そして、ギリギリと力を加えていく。

「痛い」

「だったら、大人しく着ろって言ってるだろう。たかが、男物の背広だ」

「私は女の子なの。こんな顔している所為でいつも間違えられるのに、そんな服着たくない〜ッ!!」

「お前記憶ないって言っただけだったか!？」

「今、思い出したのッ!!」

そんなことだろうとヴィンセントは理解していたが、ここで引くつもりはなかった。

「痛い、これ以上されなくなかったら——」

「イヤ」

どうやらよっぽど嫌らしい。仕方なしにヴィンセントが左手に力を込めていくが、少女は全身に力を入れて耐えていた。

「うう〜ッ!」

「なあ、おい。そろそろ、折れるよ」

「そっちが!」

「俺が折れることなど有り得る訳ないだろう」

更に拘束が強くなっていく。そろそろ、本格的な痛みを感じ始めるだろうとヴィンセントが判断した辺りで少女の動きが止まった。
「どうした？ 降参か？」

「痛いから止めて」

急に淡々とした口調に変わった。さっきまで元気に抗議していた少女の雰囲気は一切なく、冷たい鉄のような声で抗議する。これにヴィンセントは不審に思い。この状況を理解しようとするが、これだけでは情報が少ない。

なら、増やせばいい訳だ、そう考えたヴィンセントは一層腕に力を込めるが――

「――」

その瞬間少女が動き出した。真っ先に少女はヴィンセントの左手を掴み無理やり引き離す。そして、ヴィンセントと同じようにその腕に力を込めた。しかし、そこに込められた力は異常。間違いない。女子供の出せる力ではない。ヴィンセントの全力にも匹敵する握力で少女は腕を締め付けていく。

だが、ヴィンセントの関心は別の所にあつた。そう、この少女が発している力――その感覚をヴィンセントは知っている。

「コイツは面白い。まさか、『神の法則』なんざ使う奴が要るとはな――！」

問答無用でヴィンセントが蹴りを放つ。しかし、少女の片手がそれを掴み上げた。

「なるほど、それなりに反応速度は速いってことか」

先程の蹴りは溜めを行わずに放たれたもの、本来なら初動を見切れない筈だ。しかし、それを見切るということは予知に類する特殊感覚か、蹴りが放たれてから動きを合わせた以外には考えられない。恐らく後者、或いは両方であろう。

「だんまりか。まあ、しかし――」

ヴィンセントは少女を保護した心算でいたが、どうやら要らぬ世話だったらしい。そう判断したのは少女の瞳を見たからであろう。その瞳には余り多くは映っていないが、確実に見えている物がある。それは『危険』と『死』。それ以外を映さない故に冷酷に見え、それら対して獰猛なまでの殺意を放っていた。その瞳は、並みの人間には恐怖の象徴にしか映らないであろうが、その実恐怖しているのは少女であるので、そう考えると可笑しな話だ。

「悪いが痛い目に合わせる以外はないか」

ヴィンセントは右手を使いポケットから箱状の何かを取り出し、起動した。

それと同時に立ち上る冷氣。周囲の空間が運動を止め、世界が停止する。ただ、ヴィンセントだけがその空間で活動していた。

そして無論、少女も停止している。その状態は、停止であるが時を止めた様には見えず。言うならば『凍結』。あらゆる分子原子陽子電子に至るまで停止され、文字通りの絶対零度。

が――

「――」

少女は徐々に動き出す。ヴィンセントの奇跡を別の法則によつて跳ね除け、着実にそして確実に侵食して。

「ま、『神の法則』を使えるって事はこれぐらい出来て当然だな。もつとも、自分で解凍してくれるのなら、俺が態々腕を折る必要はなくなるんで願ったりなんだが」

しかし、ヴィンセントは少女の状態に関心を向けながらもどうもしなかった。唯一、した事は、完全に元に戻っていない少女の腕から拘束されている左手と足を開放しただけだ。

「もう良いだろう。痛い目も見たわけだしな」

再び取り出した《機構》を使いヴィンセントは停止を解除する。再び動き出す世界。停止前の運動や蓄えられていたエネルギーは一切変化せず、絶対零度から元の温度へと移り変わった。

そして、少女も動き始める。

「あれ、私」

困惑した様子の少女。先程のやり取りの記憶が抜け落ちている様だった。

「憶えてないのか」

「憶えて……って!!」

漸く服を着ていない事を悟ったのか、恥ずかしそうに大急ぎでシャツを引つ手繰った。

「うっ」

少女は膨れっ面でヴィンセントを睨む。

「なんだ。俺への当て付けか？」

「当たり前!!」

より陰悪になっていく二人。しかし、それを打ち破るように、部屋のドアが開かれる。

入って来たのは、黒いコートを着たアルウィーンであった。手には数個に及ぶ装飾された時計があり、盗賊として行動していたらしい。

「アンタにそっちの気があるとは、私も結構予想外だわ」

開口一番に皮肉を込めた口調でアルウィーンが言った。

「どうとでも言ってる。俺はコイツにどうやって言う事を聞かすか検討中なんだ」

「人の意見を見視スンな」

「黙れガキ」

「それよりさ、その子に着せる服なさそうだから。買ってこようと思っただけだよ——」

ヴィンセントが背広を見せ付ける。そして、アルウィーンもそれを理解したらしく。

「成る程、それでそういう状況な訳か。納得だわ、それに——」

アルウィーンの目が怪しく光る。

「私もそっちの方がそる」

「おい」

「いや、この子美形だし」

「じゃあ、コイツにそれ着させろよ」

「いいの？ よし、来たぜ、アルウィーンさんのテンションマジ上がりまくるわ」

よし来た、とガッツポーズをアルウィーンが取った。それに対して危機感を覚えた少女はシーツに包まったまま、徐々に部屋の端へと後退していく。

「さあ、さあ、大丈夫。やっべ、よだれ垂れてきた」

「ひいっ！！」

「そうやって、怯えているのもいいわ、ホント」

その光景に呆れたヴィンセントは無言で部屋を立ち去った。

「あつ、ちよつと、まっ——」

部屋を出る時、少女が助けを求めるような目で見つめてきたが、ヴィンセントは気にすることなくその場を離れた。

それと同時に悲鳴が聞こえた気がしたが、ヴィンセントは一人で思考に耽る。無論それは、少女が使った『神の法則』についてだ。

『神の法則』

それは万物を操り、あらゆる法則を支配する最上位法則『^{ワールドシス}世界法則^{テム}』を操る力。正確な名称は ロゴスソフィア。偉大なる神、アイオンが創造したこの世界の真理であり絶対法則である。

だが、神の法則の使い手がいるとすれば、ヴィンセントの様にズルをした人間か——本当の神であるかしかない。

元々この世界にはイエスにアッラーに原始宗教の神まで含め大量の神がいるが、その中でも本当の神と言えるのは都合七体のアイオンしか居らず、そう考えると少女がその中の一人とは考えにくい。「俺の知らない世界の歴史があるのか」

過去からの歴史は人類が創造された瞬間から存在している。それらの歴史は、魔術組織や宗教組織を通じ世界に残っている筈だが、

人間よりも上位存在によって紡がれた歴史に関しては取得できないのが現状だ。つまり、少女はその穴を突いた存在。何らかの不都合によって生み出された存在に違いない。

「これは資料を調べなおす必要があるな」

ヴィンセントの扱う《機構》と呼ばれる機械は、神の法則とは切っても切れない関係にある。なぜなら、《機構》とは、世界法則である神の法則を擬似的に再現した物だからだ。そして、それを研究するに当たって必要とした物は、魔術と神話の類であり、ヴィンセントはその手の資料を大量に所持してある。その中、それも世界創世記の資料をもう一度確認する事が必要だろう。

「しかし、随分きな臭くなってきた」

あの少女の背後には間違いなく何かがある。それは、少女の持っていた《機構》からも明らかだ。

ヴィンセントは右ポケットに入っている二つの物を取り出した。一つは、少女の持っていた《機構》。ヴァイオラ・アンシュッツと書かれた用途不明の物体。もう一つは、先程空間を凍結させた《機構》。このサイズで先程の規模の効果を及ぼす《機構》は発動しても二十秒も持たない。だが、打ち破るには尋常ならざる力が必要だ。しかし、少女は五秒足らずでそれを打ち破った拳句、まるで体調に変化はなかった。一個人が使いには余りにも過ぎた力を使っておきながらだ。

「取りあえず衣服に関しては心配がなくなったな」

「不満はなくならないけどねッ！」

大人しくテーブルに着いていた少女が勢いよく立ち上がって抗議した。男物の背広を着ているが、違和感を全く感じない所を見ると似合っているのだろう。それに顔は男とも女とも取れる中世的な顔であり、髪も大して伸びていない為それがより男性らしくさせてい

た。

「それはそうと記憶のほうはどうだ」

「それは……全く」

「取り合えずだ。お前の記憶喪失は恐らく一時的な物だ。その服を着る時に嫌がった様に、趣向に関しては何らかの契機で出すようだからな」

「それはそうとヴィンセント、この子の名前どうするの？」

「これで良いんじゃないか」

ヴィンセントが少女の《機構》を取り出した。そして、裏に刻まれた文字を読み上げる。

「ヴァイオラ・アンシュッツ」

「でも、それ女性名じゃない？」

遠目から見ていたアルウィーンが会話に割り込む。

「それよりもお前はどうしたいんだ？」

根本的な問題。しかし、記憶がない少女の事を考えると答えは自ずと決まっていた。

「私は——どうする事もできないから」

「セザーリオ」

「えっ」

「本当の名前を思い出すまでのお前の名前だ。それと言葉使いと立ち振る舞いは、無理をしてでも教え込むからな」

ヴィンセントは少女に向き合い、普段とは違う覚悟を纏った雰囲気ですて誓いを立てる。

「助けたからには全力で協力してやるよ。なんたって、俺はお前の保護者なんだから」

その言葉に対して、少女——セザーリオは肯定の意を返した。

「はい」

謎の少女（後書き）

用語説明を入れておきます。別になくてもそういうものだとは認識して読めば大丈夫なように書いてますが、基本原理が分からなければ見た方がいいと思います。

《機構》と『神の法則』と『世界法則』について

この三つは殆ど説明が共通しています。パソコンを例にと分か
りやすいので、それを使って説明します。

まず、パソコンは本体である『ハード』で次に『OS』最後に『ソフトウェア』といった具合で結果が起こせます。これに上記のものに当てはめると。

『ハード』↓『OS』↓『ソフトウェア』にそれぞれ『世界（地球）

』↓『世界法則』↓『各種法則（物理法則など）』となっています。

物語にも重要になってくる『神の法則』ですが、こいつは『世界法則』に干渉して『各種法則』を捻じ曲げるもしくは作り出すなどが出来る物です。普通の人間は『各種法則』に干渉する事で結果を改変します。当然、『神の法則』は『各種法則』を捻じ曲げられるので『各種法則』を都合のいい状態にして少ない力で物事を成す事ができます。

そして、『機構』というヴィンセントが編み出したアホみたいな機械は反則技と考えてもらえれば結構です。

その際のプロセスは『世界』↓『機構』となります。世界法則をなぜつつ飛ばせるのかは簡単に《機構》本体にしたい事をする分だけの『世界法則』の代替物を組み込んであるからです。それ故に《機構》には柔軟性がなくいずれも複雑な効力を持つ物はありません。

しかし、一転突破の能力はずば抜けているために、今回の話で出て

きた時間を停止させたりと異常な威力を発揮します。

始動する物語

その出来事から、いつの間にか一週間過ぎていた。最初はただどしかった少女も今ではだいぶ打ち解けたようで、少々変人であるヴィンセントとも上手く付き合っている。

「セザーリオ」

「何ですか？ ヴィンセント」

男装をした少女が振り返る。その姿は何所にも違和感を感じない物であった。元々、中世的な顔立ちであり、体つきも大人の女性に比べれば数段劣っているのも相まって、どう見ても少年にしか見えない。

そして、口調は完全に強制され、少女に見られた言葉の訛りもなくなっている。

「そろそろ、何か思い出さないのか？」

その問いにセザーリオは少し悩んだ後。

「やっぱり、全然ですね。ただし、何か切欠があれば思い出せそうな気がするんです」

「一週間経って成果なし、か。コイツを創った奴に聞きたい事は山程あるんだがな」

「最初、会ったとき 天才機構学士 って名乗ってませんでした？」

「それがどうしたよ」

「全然、進んでいないんですね」

その言葉に少し不快感を覚えたヴィンセントは作業を止め、セザーリオがいるテーブルに近づいていった。それに気がついたセザーリオは立ち上がり、台所の方に歩いていく。

「コーヒーでも入れますか？」

「ああ、頼む」

ヴィンセントは仕事を中断する時、必ずといっていいほどコーヒ

ーを口にする。それをセザーリオも数日で理解し、特別何もする事がないので彼のコーヒーを入れるようになってた。

その様子を見てヴィンセントは考えていた事を口に出した。

「コーヒーの入れ方は勿論、大抵の近代技術が分かるって事はだ。そう酷い教育を受けていた訳ではなさそうだな」

それに字の書き取りも十分出来るかどうかは既に確かめた。結果は言うまでもないだろう。一定基準の教育を受けているだろうと用意に判断できた物だった。

「普通誰でもそれぐらい出来ますよ」

「ま、普通ならな。要するに俺が言いたいのは、少なくともお前はこの街の外で育ったって事」

セザーリオはテーブルにカップを置き、コーヒーを注ぎながら街の事を思い浮かべる。

「確かに」

連れられたのは三度。一番印象に残ったのは浮浪者が通りには存在していない事だった。理由を訊ねた所、そんな目立つ所に弱者がいれば格好の獲物になるとヴィンセントが言っていた。それに通りで文字通りの殺し合いが行なわれていた所を目撃していたので、治安が悪いというレベルでない事は否応なしに理解できる。このような場所でもともな教育が行き届いているはずがないのだから、当然セザーリオの出身はここではない。

「でも、それじゃあ何も分かってない事ですよね」

言葉遣いは治っているが、どうやら皮肉屋である生来の性格は変わっていないらしい。

「お前もいい加減にしとけよ」と

ヴィンセントは台詞と違い特に気にした様子もなく、セザーリオの額を小突いた。

「うっ、ごめんなさい」

「分かればいい。ま、事実は事実だ。お前の記憶に関してはそれほど分かっていない。鍵となるのは、この《機構》だけ。お手上げと

「いえ、お手上げだ」

「やっぱりですか。あつ、それより前から聞きたかったんですけど《機構》って何なんですか？」

ヴィンセントは口につけていた、カップを一旦テーブルに置きなおし、目の前のイスに座っているセザーリオに答えた。

「そうだな……言うならば魔術やら奇跡やらそんなものを起こす機械だ」

そう言うて立ち上がると取り合えず近くに置いてある何かの機械を手に取った。

「息抜きがてら説明してやるか」

「はい」

「よし。それじゃあ、機械の説明から始めるか」

ヴィンセントが説明を始める。

「いいか、機械ってのは結局の所、この世界に何かしらの影響を及ぼす目的で作られている。俺が《機構》って呼んでる物もそうだがな。」

でだ、機械においてその手段は色々ある。例えば何かを温めたいなら何かしら熱を出す装置を付けりゃあいい。力で歯車噛み合わせで力を別の所に加えるなんてのもあるな。そいつは数え切れないし、恐らく大半の現象は科学技術が発達すればすべて実現可能になる。

そこで重要になってくるのは、そいつが全て物理法則っていう括りで動く事だ。熱を出すのにはそれに見合ったエネルギーが必要になつてくる。歯車でどこかに伝えた力は、はじめに加えたエネルギー以上になる事はない。今の二つはエネルギーの保存の法則って名づけられている。

つまりだ。物理法則という大きな括りの法則。それに沿って、様々な事象を起こす。これが俺なりの機械に対する認識だ」

セザーリオは今の説明を噛み砕き、分かりやすい形で記憶している。そして、その内容からヴィンセントの一番言いたい事を理解した。

「要するに機械は物理法則から外れた結果は作れない」

「そうだ。頭の回転が速くて助かる。まとめると既存の機械は物理法則をなぞるにして事象を作り出していく。だったら、この《機構》《こうはある発想の元に成り立たせた物だ。

物理法則が下位の結果を支配している様に、どこかにある物理法則を作り出している法則をもって物理法則を支配させられるのではないのか？」

「……何か一気に飛躍したような」

ヴィンセントは少し考えた後。

「確かに、その結論はその時点では夢想空想の域を出ていない。でも、この世に法則がある以上その法則を作っている法則があってもおかしくないだろう？」

「うーん。物理法則を決めている法則。あってもおかしくないのかどうか……？」

悩み出すセザーリオに対して分かりやすい例えを思いついたヴィンセントは説明を続ける。

「例えるなら『世界の基盤』だ。基盤があり、そこに物が存在する。俺は、この世界がそういう物だと仮定した」

「うん」

「で、この《機構》ってのは、基盤にあるだろう法則を作り出している何かを小規模ながら同じ物を作ることによって新たな法則を作り出す為のものだ」

「分かったような、分からないような？」

「前置きはこれくらいとして、この《機構》ってのは世界と言う基盤に法則を作り出すって事」

それが《機構》。世界に法則と言う名の内部構造を作り出す。機械を凌駕した存在。

「話をもう一度最初に戻すがな。世界の基盤、そいつに干渉する術を調べる事から始まった。自分で考えたが、どれも上手く行かない。そんなこんなで、結構長い事研究が停止したんだが、少し視点を変

えてみたら簡単に見つけられた」

「それが、魔術？」

「そうだ。魔術又は宗教にある特定の紋章、言葉、文字、その全てを統合し考えて、火を起こすと言われている物に共通する何かを感じ取る。それを銅線と抵抗装置によって作り出し、出力装置へと繋げ完成。何かは、本当に何かだ。感覚、第六感的なものも入ってるかもな。要するに電圧の強弱、回路の形、抵抗の種類、その他諸々でその何かの形を作り出し、電流というエネルギーを通して法則を改変する。自意識過剰気味だが神の御業だ」

この世を創造した存在があるならば、そいつが行った事と同等の現象を小規模ながら引き起こす。荒唐無稽に違いないが、それが出来るのなら、神の御業と呼ぶに相応しい所業だろう。

「それが《機構》だ。分かったか？」

「要するに法則を捻じ曲げる？ いや、作り出す装置って事ですか？」

「そこまで分かれば、後はどうでもいい。お前は使う側、俺は創る側。それぞれの領分があるんだ。無理に超えなくても、いや超えないほうが上手い事回ってくんだよ世界ってのは」

「ふーん。それ使って見てもいい？」

セザーリオが指を指した先には、ヴィンセントが持っていたものだった。

「ああ、その為にわざわざ取りに行ったからな」

ヴィンセントが投げた小型の《機構》が、放物線を描きながらセザーリオの手の平に収まる。

「火を出す《機構》だ。ただしコイツの場合は法則ではなく単なる魔術を電氣的、機械的に行なった感じだな。世界にそこに炎があるって誤認させる形で現象を引き起こす」

「へー、これが起動のスイッチで、これが出力ですね」

玩具を与えられた子供の如く、嬉々とした表情で《機構》を見回すセザーリオ。いつもの歳不相応に落ち着いた雰囲気ではなく、本

当にどこにでもいるような子供の様だった。

「それじゃあ、使ってみます」

ピンと人差し指を立て、起動スイッチの場所に持っていく。見せびらかす様に行動するセザーリオはやはり、誰かに構って欲しいのだろう。ヴィンセントもその程度の感情の機微を気づかないほど鈍感ではなく、自らの子供を見つめるような気分でその様子を見守っていた。

「カチっ」と

そして、セザーリオがスイッチを押した。

それと同時に響き渡る轟音。

《機構》がもたらした火ではない。それ以上に破壊力のある何か、この研究室の窓から研究所全体が揺れる程の衝撃をもって揺らしていた。

「な、何ですか？　もしかして自分のせい？」

この異常な状況を飲み込むことが出来ないでいたセザーリオ。普段ならば、研究所の三階の窓から響いてくる轟音を聞き取り、理解するだけの知力と柔軟さを持ち合わせているが、今回ばかりは本当に不意を点かれた様で何も出来ないでいた。

「バカか！　コイツは違う。おいおい、ここ三階だぞ。重火器ぶっ放すならともかく単身で乗り込んでくるのはどこの馬鹿だよ」

実際、ヴィンセントは目立つ割にあらゆる分野を高次元でこなす本物の天才だ。故に目の敵にされている事は周知の事実である。時折、襲撃を行なってくる馬鹿がいたが、研究中に調べ上げた魔術を応用し、この研究所を強固な要塞と化しているため、例え重火器だろうと窓を破壊する事は難しい。だが、今度の襲撃は全てが違う。轟音が鳴り響いているが、重火器にしては音の質が違いすぎ、発射から衝突までにある音の切れ目も聞こえない。

「何かで窓をブツ叩いてやがる」

音の種類と聞こえてくる間隔からその結論をだす。轟音の理由は余りにも規格外の力で衝撃を加えられているだけだ。

「セザーリオ、お前は屋上に行け。俺は手持ちの武器をかき集めてくる。教えておいただろう、屋上の絶対安全領域」

「分かりました」

絶対安全領域。ヴィンセントが緊急時の為に創り上げた対襲撃者撃退用スペース、屋上で唯一そのトラップに引っかからない場所だ。「まったく、面倒な事になったな」

悪態を吐きながら、有りつ丈の武器を集める。銃を四丁、セザーリオの分を入れればこれで足りるだろう。それと出来る限りの《機構》を集める。

「そろそろか」

そう呟いた時には、この研究所を揺らすほどの衝撃は消えていた。それはつまり、この研究所に仕掛けてある結界が破られた証拠であり、襲撃者がそう

「ちよつといいかしら」

進入した証拠でもあった。

金色の襲撃者

度重なる大きな揺れのおかげで、既に照明は切れていた。今は窓から入る月明かりだけが、唯一の光源となっている。

その暗がりの中にこちらを値踏みするように見ながら立っている襲撃者。体格は小柄、それに恐らく女性だろう。それを踏まえて考察すると年齢はセザーリオと同じ位か。ヴィンセントはそう判断するが、襲撃者の両腕にある身長のおよそ三分の二はあるだろう大剣は大柄の男でもそう易々と持つことはできない。

「お前何者だよ」

分からなければ、訊ねるしかない。出来ればその異常な怪力に似合う、脳筋女ならいいと思いながらヴィンセントは訊ねた。

「聞きたいのは私の方だけど。まっ、構わないわ。あなたを殺す理由はないし、殺しは好きじゃない」

喋れる。会話も出来る。少なくともそれだけでヴィンセントにとって最大の危機を回避した。一番やばいのは会話が成り立たない事。逆を言えば成り立つと同時に、相手が人間的な思考をしている可能性が高い。そうなれば――

「俺の勝ちって事だ」

「何？」

「いや、こつちの話だ。それで聞きたいんだが、何で俺の所に来たんだ？ その分だと個人的な恨みって線はありえないだろ」

「当たり前じゃない。何でアナタなんか気になくちゃいけないの」

「で、理由は？」

「臭いから」

おいおい、とヴィンセントが突っ込みを入れた。臭い？ 魔術的なものだろうか？ だが、自分が持っているものはその大半は文献

だ。

「人の家が臭いからって、壊そうとするなよ。馬鹿かお前」

「あっ、違う違う。そうじゃなくて、私にとつて嫌な匂い。いいえ、気配がするの。あなた、女の子とか匿ってる？」

それは間違いなくセザーリオの事だろう。何故と疑問が沸くが、そのような事はこの状況で考えるべきではない。

「大人一人の家で少女匿ってたら世間的にやばいだろう。何なら、下の戸棚でも見て来いよ。男用しか入ってないぞ」

嘘だ。だが、動揺はしていない。これなら――

「あなたは嘘を吐いている」

しかし、襲撃者は一瞬で見破る。ハツタリではなく絶対的な確信をもつて言い切った。

「ふっ、理由は？」

「ただの勘よ」

暗闇の中、視認する事は出来ないが静かに笑いながら、コツコツと足を床に小突いている。癖だろうか？ 稀にそのような行動を無意識で行なっている人種がいるのは事実。だが、この場は緊迫した場面。自分の癖を把握していないバカなら勝率は上がるが、相手はその様な低脳ではない。

突然、少女が上を指差した。

「上ね」

「残念、外れだ。確かに屋上はあるが、地下に降りる秘密の通路がある。今はもうどこかに行ってるんじゃないか？」

地下に降り通路の存在、これは事実だ。足を叩きつける行為の理由を考え、自分が出した回答からこのハツタリは通じるはずだ。相手が足で行なった理由は、振動を使ってこの家の構造を把握したのだろう。笑うしかない回答だが、自分の勘は良く当たる。

「それは嘘。私の勘が外れるはずないもの」

なるほど、とヴィンセントは納得した

「やっぱり俺の同類か。こいつはお目にかかれない人種だな」

自分と同じ本物の天才。あらゆる状況下で最適の回答を導き出す、言い換えれば何であろうと都合良くこなしてしまう人間以上化け物未満の貴重種だ。

「独り言を言ってる男はもてないわよ」

そして漸く襲撃者が動き出した。向かう先は一直線、屋上に登る階段だ。

「おっと、そいつは読めてたぜ」

ヴィンセントが一丁の銃を取り出し階段に向けて放った。襲撃者の移動速度は獣じみていたが、絶妙なタイミングで銃弾が行く手を塞ぐ。

「私もよ」

しかし、襲撃者はその大剣であろう事が銃弾を視認し弾き返した。「だから、読めてるっていったらう」

だが、ヴィンセントはこれだけで終わらない事を理解していた。仮定でしかないが三階に跳躍してこれる脚力、この研究室を単体で揺らせるほどの豪腕を考えれば、敵がどれだけの速度で動くか予想できる。

”コイツはとてつもなく速く動く”

それだけ考えれば、音速だろうがなんだろうが認識一つで対応できる。

出現したのは一つの結界。任意座標に発生させるタイプの《機構》だ。小規模であるが、範囲が狭い為強度だけ見れば家に張っているものと変わりはない。

「でもそれこの家に設置してるものでしょう。だから——私も分かっていたわ」

そして銃弾と同じく結界も切り裂かれた。結界の強度は、ここに持ち出せる大きさであれば現存するどんな重火器であろうと壊せない。だが、重要なのは彼女が分かったことだ。先ほどの振動だけで家に仕掛けている罠の種類まで把握していた。つまり、魔術の

類に精通しているという確証。この事実、さすがにこれはヴィンセントも驚く——事などなかった。

「じゃあね」

階段に足をかけ、友人に言うように襲撃者は別れを告げた。それをヴィンセントは不適に笑い。

「ふっ、待てよ、だったらコイツはどうだ？」

その言葉とほぼ同時に室内に響き渡る銃声の轟音。そして、ここからともなく連射される無数の弾丸が侵入者に向けて放たれる。だが、侵入者の瞬発力では音を聞いてからでも対処は可能——であるはずだった。

「なっ!!」

しかし、階段を駆け上がったとした襲撃者は何かに阻まれ一時停止する。そう結果を張れる《機構》は一つではない。そして、それは必ず設置しなければならない訳ではない。ヴィンセントが発動させたのは今手に持っている小型の《機構》。威力は数段劣るが、一瞬でも隙を作れば十分役目を果たせる。

「ちっ!!」

襲撃者が飛び退く。そして、睨むようでありながら賞賛と興味の色が強く表れた目し、ヴィンセントを見た。

「不思議か？ 教えてやるよ。こういう事だ。光学迷彩 Stealth・解除」

そして右手を使ってヴィンセントはその《機構》を解除した。無色透明、ステルスで隠されていた物体。武骨で室内にはまるで似つかわしくない大型銃器——ガトリング砲が現れる。なぜ襲撃者がそれを感知出来なかったか、その理由は誰が見ても分かるだろう。そう、ガトリング砲は何もない空間で宙に浮かんでいた。

「そ、それ——ッ!!」

襲撃者が驚愕を述べよとした瞬間。その開いた口に何かが高速で

撃ち込まれた。音も立たず放たれたそれは襲撃者を吹き飛ばし、その体が壁へと打ち付けられる。

「光学迷彩に加え音を一切出さない銃弾と銃だ。観察してたが、目に頼りすぎなんだよお前」

襲撃者は暗闇の中、全てを視認していた。ヴィンセントは微かに見える輪郭の角度から銃弾の対処の時などを考察し、視認していたと判断。感覚で対処できるのなら見るはずがない。そう結論を出し、このタイミングなら今の現状を作り上げられると実行した。

銃弾は恐らく口内に当たっただろう。だが、襲撃者はゆっくりと立ち上がった。

「痛いわね。レディの口に銃弾ぶち込むなんて、とても紳士的じゃないわ」

恐らくは無傷。血の一滴すら流れていないようにも思えてくる。

「なんとなく予想してたが、コイツは流石にきついな。主に俺の精神的に」

本当に何事もなく立ち上がり、吐き出した銃弾がゴロンと床に落ちた。

しかし、出し抜けたのは事実。ならば——とヴィンセント・フィッツモーリスは確信していた。負けることなどありえない。

だが、彼は気づいていなかった。自分があると仮定した世界の真理。その最深部がどこに繋がっているのか、この少女はどういう存在なのか。もし、理解できていたのなら、この場でこの少女を殺す事が可能だったかもしれない。だが、今だ人生で決定的な敗北を経験した事がないヴィンセントは己を悔い改める事などすることはないだろう。

屋上、その一角にセザーリオは立っていた。

手にしているのは一丁の拳銃。屋上に放置されていたものだ。残

念ながら弾は入ってなかったが、脅しとして使う分には十分だろう。そもそも、自分にはこんな危険なものを撃つ度胸などないのだから――弾丸など幾らでも作り出せる。

「何、今の感覚」

背筋が冷える。自分が二人いるような感覚。実際、過去に記憶を持っている自分がいるのだから、二人いるという表現は間違っていない。間違っていないのだが。

「一人は不安で怖い。だから早く、早く来てよヴィンセントお」

不安が溢れて、子供のように泣き出しそうになる。

こうなった彼女はセザリオと言う名の仮面が外れ、あの時、ヴィンセントに拾われるまで何も出来なかった無力で弱いヴァイオラでしかない。

聞こえてくる銃声が脳を揺さぶる。何事もない筈なのに、脳裏に何かが高速で掠めて行き、不安が急速に積もっていく。

それと同じように自分の記憶が断片的に蘇ってくる。

忘れていたい過去でありながら、愚かにも取り戻そうとしてしまった物。そして、銃声と言う彼女を象徴する記憶が、決定的な映像を記憶から引き出した。

銃と言う忌々しい殺人道具によって命を奪われた人間が三人。大事な人だったのだろう。記憶が蘇った訳ではないのだが、なんとなくそういうことが、そういう悲劇が起きてしまったのだと分かる。分かってしまう。それと同時に感じた時の喪失感と恐怖感も蘇り、彼女は壊れていった・正常になっっていた。

「怖い」

余りにも恐怖する記憶を幻視してしまい、自分を保てない。

「怖い」

あんな思いをするのは嫌だ。今の彼女に存在する物はそれだけだった。

奪われる事の恐怖。誰かが死んだときに感じた悲しみの大きさに加え自分の死に対する恐怖。その二つが間違った方向へ、向かい彼

女は 銃奴^{ガンスレイブ}へと変えていく。

「私に恐怖感を与えるものは全部いらない。だから――」

全てを壊そう。全てを殺そう。死にたくない。死にたくないから、自分を脅かすあらゆる存在を殺めるのだ！！

そして、それこそが自分にとって一番の―― ■ ■ ■ だから。

対峙する二人は互い牽制し膠着状態が続いていた。

「さあ、第二ラウンドと行こうぜ」

ヴィンセントが漸く、動き出そうとしたとき、それは起こった。両者とも何が起こったのか分かってはいない。だが、間違いなく感じていた。屋上で何かが起こったこと、ヴィンセントはそれを瞬時に理解した。

しかし、ヴィンセントすら感じられなかった”あるものの気配”を感じ取った女がここに一人。

「やっと、見つけた」

侵入者の纏う雰囲気が変わった。周囲にぞくりと来るような死臭を感じたように死が間近に迫ってくる感覚。先ほどの勝算が泡のように消え去っていく様に感じられた。

これが彼女の實力。敵を斬殺に導く戦乙女―― 斬殺姫 の本領に他ならない。

ヴィンセントは勝手に両腕が動いていた。二挺拳銃を素人とは思えない天才の勘で連射する。

「うおおおおおおおッー！！」

撃つ。撃つ。撃つ。引き金を一心不乱引き続ける。彼を動かしているのは恐怖だった。

理解できない。自分より強いものが存在している事がありえない。自分が常に頂点だった。人も人を外れた人間、魔術師、超能力者、

神、何であろうと抜き去った気持ちでいた。だから、これは初めての挫折。

俺が勝てないだと。俺が何も出来内だと。何を恐れる？　ヴィンセント・フィッツモーリス。

勝てない事？　何一つできない事？　そうだ。自分はこの程度だと自覚する事。それが一番恐ろしい。なら、目の前にいる全銃弾を意図も容易く切り刻んでいる怪物は、俺の感じている恐怖見比べればどうしようもなく小さい筈だ。

今分かった世界は広い。だから、同時に理解する。自分はこの程度で終わるはずがない。この広い世界で神の座に至るような絵空事に臨む者がその程度で良い筈がない。

震えが消えた。しかし、このままでは勝てない。そもそも、この場で勝つことは不可能だと先ほど悟った。

いつもどおりの勘。それを駆使し、既に相手が神の座に足を踏み入れているのが分かる。だからこそ言いたい。人間以上の存在になって神になろうとするそんな方法に叫びたい。

「そんな、屑みたいな方法で神に至るだと、神に成り変わるだと」有りつ丈の憎悪を込めて、その行為を認めない。その方法はないと糾弾する。目の前の化け物が望んで人から成り下がったのかもしれない。或いは他の誰かだったのかもしれない。だが、人はかくも美しい。それを、誰であろうとその美しさを――貶める事は許さない。だから――

「スマートじゃねーんだよ……」喰らいつく。そうすれば、あるいは眼前の化け物に届きうるかもしれない。

マズルフラッシュの光により見えた歪んだ口元と血走った少女の目。瞳孔が開ききり、正しく狂気と呼ぶに値する。しかし、誰であ

ろうと恐怖で塗りつぶされるその目を正面から見据えて、ヴィンセントは正気を保ちながら一つの《機構》を取り出した。

「光共振器―反転分布―誘導放出《Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation》」

形は筒状で手に収まる大きさ。その先から放出される光を敵に向かって振るう。放出される光は魔性の力によって更に高められ、あらゆる加護を切断する魔性の刃となる。そして、小型の《機構》はその軽さゆえに驚くほど速く振るわれ、侵入者を襲った。

「ぶっ切れるッー!!」

しかし、無刃の刃は避けられ、壁に一筋の線を入れたただけだ。

「じゃましないで!! やつと、やつと見つけた。これが消したかった。この匂いと気配、いい加減イライラする」

斬殺姫 は最初に入ってきた窓から飛び上がった。向かいの建物の壁を蹴りつけ、屋上へと登る。

「逃がすか!!」

ヴィンセントも敵の行動を悟ったと同時に階段に向かって駆け出していた。

「セザーリオ」

屋上に行かせた少女。敵は間違いなく彼女を狙っている。記憶にない部分で、彼女が何かしたのかまるで分からない。だが疑問があった。敵はヴァイオラ本人を見ていない。まるで、そのにある何かを幻視している様にも思う。

そして、屋上で何かが起こった感覚。何一つ自分は分かっている。だが、確実に分かる事が一つ。十中八九、セザーリオが関係していることは間違いない。

「助けたからには、最後まで面倒見ないと」

屋上への階段を登りきり、勢いよくドアを開ける。その先で見た光景。間違いなく人生で驚いた事のトップに来るだろう光景だった。

金色の襲撃者（後書き）

ようやく戦闘に入りました。次話でプロローグは終わります。

銃奴 ― ガンスレイブ ―

「恐怖は殺す」

その言葉を呟いた。時を同じくして、向かいの建物を使って屋上へと飛び上がる少女が一人。月夜に照らされた髪は金色。中央で左右に別けた長い髪を揺らしながら、屋上に着地した。

「見つけた」

渦巻く瞳は狂気。闘争心と復讐心、殺意と恐怖を織り込んで、見るもの全てを威圧する。

「その匂い、気配、存在、全てが許せない」

分からない。分からないが、憎いのだ。目の前の半神の中にある何かが堪らなく憎く、殺意が肥大していく。

だが、セザーリオは動じない。恐怖を感じていない。その少女の手に握られている二本の大剣もすべからく彼女にとっては恐怖の対象ではなかった。

屋上の床が蹴られる。その脚力は足跡を残すように床を凹まし、身体は異常な速度を持ってセザーリオに迫る。だが、高速で近づいてくる敵を見てもセザーリオは恐怖感を憶えない。しかし、僅かに残る理性で危機と判断したセザーリオは、銃弾の装填されていない銃を高速で迫り来る少女に向けた。

そして、有り得ないノズルフラッシュが起こる。いつの間にか装填されていた幻想の銃弾が、火を吹く銃身から放たれた。

「遅い！！」

女の目が容易く銃弾を捉え、大剣で横に薙ぎ銃弾を弾き返した。本来装填されていない銃弾は、砕かれ泡沫の夢のように現実から消える。それでも、セザーリオは怯まず撃ち続けるが、女はその全てを二本の大剣を巧みに操り悉く叩き伏せた。

「この程度？ さっきのやり合った奴とは天と地ほど差があるわね。所詮、プロトタイプ、運がよかっただけの素体って事かしら？」少女はセザーリオの間近に迫っていた。既に大剣を振れば仕留められる距離にいる。それでも、セザーリオは目の前の敵が何をしようとしているのか本能で理解できないでいた。

だが、ここに来て女は疑問を覚える。銃を撃つのは分かる。だが、どうしてこの女は恐怖していない。死ぬ事を知らないような。そう、これで刺されれば人がどうなるのか、いまいち分かっているような——

「どちらにしろ。これで終りね」

驚くほど容易く大剣はセザーリオの腹に深々と突き刺さった。その刀身の半ばより深く刺さり、溢れ飛び散った血が、金色の髪と服を赤に染め上げる。

「これで殺しきる。吸収などしない。その存在をかき消してやる！」

言霊はセザーリオに宿る何かに向かって放たれる。セザーリオも何かが消えていくように感じていた。死を司る何か、それが徐々に消えていく。それとは関係なしに、どくどくと際限なく滴り落ちる血液。自分が削れ荒れていく感覚。より明確に、より分かりやすく、脳に叩き込まれる自らの死。それが、彼女の記憶を呼び起こす。怖さ故に恐怖の対象をすべからず虐殺していった幼い自分。あの日、十代の少女が一度も握った事のない銃を完全に使いこなした記憶が蘇る。身体も能力も思考も全ては銃を完璧に撃つための道具。すべては敵を殺すために——

「これが私を殺すの？」

肺に入る血により上手く喋れない。だが、自覚していく。これが私を殺すもの。そうだ、そうだ、そうだ、死にたくない、死にたくない、死にたくない。そして死を実感し目の前の刃に恐怖する。それだけ、だから殺す。殺さないと安息は訪れないのだから。

初めての恐怖は肉親が死んだ事。その時、感じた恐怖はどれ程の

ものか、恐らく自分が認識していた世界よりも大きい。そして、考えてしまう。他人が死んでこれだけの恐怖を感じるのだから、自分が死ぬのはどれ程の恐怖だろう。その恐怖の大きさを考えること自体が強大な恐怖。だから、殺す。自分に僅かでも死を連想させる小さな恐怖を――

「怖い。死ぬのが怖い。だから、どんな恐怖も殺さない」と

セザーリオの腕が上がり、銃の標準は女の眉間へと向けられる。

「お願い。死んで」

そして、引き金が引かれた。

「くッ！」

金髪の女にとっても予想外の事態。突然、溢れ出した生命の灯火に危機感を覚え、大剣を残し後退しないでいれば、あのまま眉間に穴が開いていただろう。

何が起こったのか知る由もない。だが、油断していたのは事実。

この程度ならどうとでもなると思っていたのも事実。それを簡単に覆された。出来損ないと言っていたが想像以上に化け物だ。殺意もなくただ観測を繰り返す目。自分とは違ったベクトルに向かった狂気の産物。逃れられないと直感してしまう絶対感。

「ごお……ふッ！」

セザーリオは、大剣を血反吐しながら引き抜こうとしながら、同時に銃を構え直した。その間も瞬きすらせずに視線は女を捕らえ続ける。

「があっ……ぐふっ……！」

血に染まった大剣が徐々に引き抜かれ、体から血液が流れていく。その量は致死量にもうすぐ届くだろう。だが――

「はは、これは本当に」

銃口の先は自らの眉間に合わされ、銃身は細かに動く。手元が狂っているだと始めは考えた。だが、違う。

「銃殺姫、その名に相応しい化け物ね」

銃身の揺れは、少女の動きに合わせて動いている。呼吸の度に上

下する極小の動き。それすら捕らえて逃さない。

セザーリオから大剣が引き抜かれる。それと同時に塞がっていく傷痕。尋常ではないスピード。僅か一秒足らずで、拳ほどの穴は三分の一は塞がれた。

「もう嫌な臭いと気配は消せたけど。最後までやらないと駄目そうね」

あの体に入っていた打破すべき物は殺しつくせただろう。何より自分が理性を保てているのだからそれは明白だ。もう目的は果たしている。だから、ここから撤退するのが利口だろう。

だが、逃げるなど言語道断。騎士道を語るつもりはないが、瀕死の状態で気力を今だ絶やさずいるこの敵に全力で迎え撃たないなど失礼に値する。そして、何よりあの臭いと気配を振りまく存在が周囲にはいない。何と清々しい事か、爽快感と月に魅せられた衝動で、この場この時の興奮が数倍にも感じられる。

「感謝しきれないわ。この場、この時、この状況であなたに会えて本当によかった」

この胸の興奮を永劫刻み付けるため、これが始まりと感じながらも今この場所で決着をつけましょう。

さあ、心してかかれ。目も前に居るもう一人の化け物は、今までとは根本から違う。

セザーリオは女を観察して気づいた事がある。ドレスのような煌びやかな服装に刻まれた無数の傷跡と血痕。服の合間から見える肌は完全に塞がっているものの、霊格と魂が大幅に削られている。つまり、敵も満身創痍。自分となんら変わりなく、今の状態こそが本当の拮抗と呼べる。

だが、怖い。相手は私を殺せる武器を持っている。何と怖いことか、何と恐ろしいことか。だから、殺さなくてはならない。私に大剣を触れさせない。しかし、そんなことは絶対に起こりえない幻想

だ。だけれども、いつ何時もこの銃口を向け続ければ、そんな幻想も現実となるだろう。

少女が動き出した。

最初に知覚できたのは聴覚ではなく視覚、地面に足を叩きつけるように蹴りつけ加速する少女の姿。

だが、次に確認できたの時には既にセザーリオの正面に迫っていた。そして、それを追う様にして聞こえてくる蹴りつけた音とソニックブームによって挟られている地面がその速度を物語っている。

セザーリオの銃口が眉間から離れ、少女の待つ大剣へと向けられる。だが、これでは駄目だと直感していた。相手に向け続けるのだ。そうしなければ勝てない。

セザーリオはそのまま引き金を引き、出来る限りの速度で銃弾を発砲した。

大剣は、振りぬく途中で浴びせられた数発の銃弾によって弾き飛ばされる。その衝撃は通常の銃弾の比ではなく、大人であろうと逆らえない。だが、少女は大剣を手放さない。そのまま押し返し強引に大剣を振るう。

しかし、遅い。既にセザーリオは既に後ろに飛び退いた後だった。「ふふ、残念」

間を置かずに追撃すると思われた少女。だが、その手は予想外にも下に向かつていき、開いた片手で床に落ちていた朱に染まったもう一つの大剣を手取る。

「これで、終わり！！」

セザーリオが後退した距離は、少女の攻撃可能範囲から考えれば僅かしかない。加えて打ち落とすべき対象は先ほどの二倍。一度目が大剣を拾う事を考えていたのなら、二度目は必殺をもって挑むはず。まさに窮地。絶対の逃げられない魔の剣によって斬殺される未来が頭の中に描かれる。

死へのカウントダウン。その刹那にセザーリオが聞き取ったのは

予想外な人物の物だった。

「セザーリオ！！ やられたんなら、やり返せ」

グインセントが叫ぶ。その声が迫り来る死の光景よりも信頼の置ける物だった。だから、氣力を絞り、蹴りを繰り出そうとした。しかし、間に合わない。明らかに差が出てしまっている。だが、セザーリオの狙いはそこではない。

「物理法則―指定改変―力学ベクトル反転！！」

屋上の更に空中、そこに浮かぶ何かが発動した。

効果は一瞬。されど絶大だった。今にも飛び掛ろうと地を蹴り上げた少女。その移動方向が反転。一瞬で逆向きへと変わり、振り抜いた大剣も同様の現象が起きる。その様子は壁に激突するために蹴りあがったと見間違うほど鮮やかに、体が屋上に叩きつけられていた。だが、効果はそれだけでは終わらない。血液が、身体を動かす神経の微弱な電気信号が須く狂い、乱れ、身体にあらゆる異常のシグナルを引き起こす。まともな人間ならそれだけで死を間近に見るだろう。

「あらゆる力の流れを反転する最強の結界ってな」

だが、曲がりなりにも彼女は超人。それだけでは決して死なず。そのハンディをもつても常人なら容易く切り刻む。だが、セザーリオがそれをさせない。セザーリオが居たのは唯一先ほどの法則転換に巻き込まれない場所だ。つまり、セザーリオの行動の方が一手も二手も速い。

「はあっ！」

少女の胸をこれでもかと蹴りつけ、距離を空ける。接近戦では勝機はない。だから、自分の間合いを相手より先に作り出し、どうやっても崩させないこと。これが唯一、セザーリオが取れる戦術だった。

銃をもつ一度構える。もう、逃さないし、逃がさない。

「絶対に当てる」

蹴り飛ばした少女。地面に接触する直前に身体を反転させ、一切

の時間を置かずに再び飛び掛る。死闘の火蓋は既に落とされている。故にどちらかが、決定的な打撃を一度切れない限り止る事はない。

金髪の少女はまたしても音の壁を容易く凌駕し音速で駆け抜ける。巻き上がるソニックブーム。再びそれを見て確信に至る。敵の速度は速い。しかし、自分の反応速度は少女の数十倍以上なのは確実。ならば、それに賭ける。

半分を過ぎる前に発砲。敵は驚きこそしたが、最小限首を動かし容易く避ける。常に狙っているのは眉間。その場所に必ず来ると分かっている。そして、この距離なら避けられぬはずがない。それは両者理解していた。

勝負は次の瞬間に決まる。距離が縮み、それと同時に避ける難易度が格段に上がる。

少女が一步踏み込めば大剣の攻撃範囲に届く場所に来た時、再び銃弾が放たれた。

「見えた」

百分の一秒の攻防。それを見極め、銃弾が放たれたと同時に大きく、横に避ける。そして飛び退きながらも足腰をただし大剣を振りぬけるように着地しようとしていた。

それに対し 斬殺姫 は勝利を確信し、しかしながら 銃殺姫 はもう一つの忌み名を披露する。

そう、 銃殺姫 は 斬殺姫 が飛び退いた事をわずか千分の一秒で知覚。そして――

動く。セザーリオではない。銃が 斬殺姫 の眉間に合わされたまま、動いていく。そして、それに追従するように動く手足と体。まるで銃の奴隷であるかのように、銃の手足となって動いていく。唯一の例外はあらゆる物を逃さない死眼のみ。

「まさか!？」

そう、銃弾を撃てば、再び標準を合わせる時間があるなど希望的

観測。なぜなら、彼女は銃の奴隷　銃奴^{ガンズレイフ}。銃口は常に相手に向けて
られている。距離があるなら避けられる。だったらゼロ距離で撃て
ば問題がない。荒唐無稽な彼女の理屈。それが、格上の相手から勝
利を勝ち取る結果となった。

今だ眉間を狙い続ける銃口は、横に飛び避けた　斬殺姫　を捕ら
えて離さない。

「死ね！」

銃声が響き渡った。　斬殺姫　が頭から吹き飛ばされるように、
離れていく。それを見て勝利を確信し、同時に今まで我慢していた
疲労感が一気に押し寄せた。

頭が朦朧とし前が見えない。駆けつけてくるヴィンセントの声を
聞きながら、　銃殺姫^{ガンズレイフ}　はゆっくりと意識を落としていった。

銃奴 ― ガンスレイブ ― (後書き)

プロローグ終了です。キャラの設定を挟んだ後、次から本格的に物語が進みます。

設定集1

セザーリオ・フィッツモーリス（ヴァイオラ・アンシュッツ）

女・14才

本作品の主人公。神を生み出すために選ばれた五人の 殺戮姫 の一人。冠する称号は 銃殺姫 。本人の戦闘能力は格段飛びぬけている訳ではないが、銃の扱い、曲芸撃ちから長距離射撃などをハンドガンで行なう技量持ち。それよりも飛びぬけているのは視覚で、動体視力は音速が止まって見えるほど。しかし、体が追いつかず銃弾も音を超えていないので他の 殺戮姫 を圧倒する事はまずない。恐怖心に疎く、しかし恐怖する事に異常なまで怯えている。簡単に言うとは、一度傷つけられない限り恐怖心を正しく感じられず、二度目では徹底的に排除しようとしてしまうという習性持ち。それも含めて死に直面した時、自分から動く事が出来なくなる縛りがあり。その縛りが無くなった時に、セザーリオの戦闘能力が他の 殺戮姫 と戦えるまでに上昇する。

性格

礼儀正しそうに見えるが、口が悪く皮肉を言ったり、口答えしたりと自己中心的。基本的に隠してあるが、自分を中心にしか考える事のない利己的な人物でもある。

ヴィンセント・フィッツモーリス

男・32歳

現在の人間こそ至高と信仰する天才科学者。科学者と名乗っているが、ほぼあらゆることに對して高次元にやり遂げる本物の天才でも

ある。第六感がすさまじくよく、世界を構成する回路のような物を自力で発見してしまうほど。そして、それにより《機構》と呼ばれる法則発生又は改変装置を創り上げる。また、それを見つける際に魔術の研究をしており簡単なものなら全てが使える。ただ、それを使う事は理念に反するので戦いには一切使わず、面倒な物を片付ける場合にしか使わない。超人的な身体能力はないものの戦闘能力は殺戮姫と同格。ただ、自分の能力を最強だと考えていた所があるので、斬殺姫と対峙するまで大きな油断があり、そのままであれば 殺戮姫 に負けていたと考えられる。ただ、今回の戦いでそれを悟り、ほぼ数秒で克服したので今は一切の隙がなくなっている。

性格

自分勝手の印象が強いがそもそも人に関心を持つ事が恐ろしく低いのが原因である為、実際にはセザーリオやアルウィーンと比べると少し利他的な側面がある。それは、セザーリオを厄介事と認識した後も一度保護したんだから、と最後まで突き通そうとすることから分かる。

アルウィーン・レイヴァース

女・25歳

街で盗賊紛いの事をやっている人間。しかし、余りにも手際がいいので盗賊と認知されておらず、街で起こる犯人不明の窃盗は『風の盗賊』の仕業とされている。その手際のよさは常人を超越しているが、味方陣営の三人の中においては圧倒的に最弱。ヴィンセントの足元にも及ばない。しかし、戦闘能力は高いので街でも有数の実力者である。主に使う武器はナイフで、仕事の際には分厚い黒のコートを羽織って戦う。コートはヴィンセントが作った《機構》の一

つで、コート自体の強度が並ではない事とナイフを無限に作り出せる。

性格

つかみ所のない性格で、余り真面目に行動する事がない。また、セザーリオより利他的な側面もあるが、本質的に善性ではないので、三人の中では最も悪人としての側面が強い。無論、警察の手の届かない街の中のみであるが、気に食わない相手がいれば問答無用で殺したりする。

幕間劇

満月の夜、より強い月光が降り注ぐ場所に二人の男女が立っていた。男は恐らく三十歳代に近く、女は十代中盤といった所だろう。

「ふむ、少々見学の心算で見に来たのだが、これは……面白いと思うべきか恥ずべきか。どちらにせよ、予想外の出来事には違いない」
そう男が呟いた。

男たちが立っている場所はこのロンドンでもかなりの高度に位置するビック・ベンの時計台だった。そこから見下ろすように、イースト・エンドの外れ街を見ている。

見ていたのは二人の 殺戮姫 による決闘。無論、ただの殺し合いであるが、その戦いにおける技量のぶつけ合いを無粋な言い方で表すことは出来ず、言葉にするならば決闘と呼ぶ他ない。

「確か 斬殺姫 は二度目の戦いだろ。しかも、一戦目は惨敗。殺されはしなかったものの一方的に痛めつけられてたからな」

男の横いた少女が言った。それは 斬殺姫 が本調子ではない事を示す物だったが、少女と男は 斬殺姫 が負けるだろうと考えていた訳ではない。むしろ、その逆であった。

「だが、だからと言って 斬殺姫 は 銃殺姫 とはレベルが違う。正確に言えば、肉体の初期設定が違いすぎる。にもかかわらずだ」

そう、 斬殺姫 は競り負けた。一瞬とは言え、 銃殺姫 が上回った。もしも——もしもの仮定で 銃殺姫 の肉体スペックが上だったのならば。

「けど、あり得ない話ではないけどな。肉体初期設定は 斬殺姫の方が上だったとしても、 銃殺姫 魂の格が思いのほか高かった、てことだろ」

「悪いが、私はその事情については余り詳しくない。少しご教授もらえないかな」

「そうだな、 殺戮姫 に選ばれたのは過去の人間。それも犯罪者を選び、神の肉体として再生できるようにして創り出した。これはお前がやったんだから、分かっているよな」

殺戮姫 —— ^{アルコン}半神とも呼べる人間と神との中間存在。それは丁度人間時の肉体と神の肉体が半々になるようにクローン技術で再生された人間だ。しかし、男が試したところ只の人間では全くといっていいほど成功しなかった。肉体を生成する際、どうしても人間の肉体が負けてしまうのだ。そうすれば、神の肉体となり、もう人とは呼べず、人間の器でない以上人間の魂は宿らない。かといって神の魂が宿るかといえば、そんな信仰の欠片のない場所に現れる方がおかしい。

男はそれでもあの手この手を試すが結果は同じだった。そして、行き着いた答えは魔術師の冗談染みた言葉だ。

『ならば、神をも退くほど傲慢な人間でも使えばよいのではないか？』

今にして思えばだが、あの魔術師は全てこうなる事が分かっている、そのように言った気がしてならない。しかし、そのような事は男にとつてはどうでも良かった。必要な物は目的とその手段、それが分かったのだから些細な事に興味はない。

傲慢な人間、即ち法に外れるような者たちが適任だ。犯罪者、それも死人を使おうと男は考えた。

そして、古今東西の著名な犯罪者の遺伝子を集め、実験を再開した。一番、最初には無名の殺人鬼を一割に満たない神の肉体と人間の肉体で試験し、結果は成功した。無論、神の肉体の比率が低かった事が成功の要因だったが、それでも今までとは比較にならないほどの結果である。男は、それを元に解析し、恐らく神の肉体と人間の肉体を半分の比率でも問題ないと判断した。

しかし、結果は散々であった。何体か試してみても失敗の連続、人間の肉体が侵食され神の肉体の比率が勝り死んでしまう。確かに今までよりも成功に近づいている事を実感していたが、どうも上手

く行かない。

だが、男は持ち前の勘を持ってこれに賭けた。全ての素体に試してみた所、成功する素体が出てきたのだ。そうして、上手く行ったのが他の三人。その知らせを受けた魔術師が、新たに拵えて来た神と人間の遺伝子を組み合わせた素体が二体。これが実験の成果だった。

最初の試験体は言うまでもなく 銃殺姫。他三名は 殺人姫 吸血姫 毒殺姫。そして、魔術師が用意した素体 斬殺姫。そして、この実験の相性が良かったのか成功したのは女性体のみであった。故に彼女達に付けられた名称は 殺戮姫。

「なるほど、思い出した。結論から言うと神の肉体による侵食に必要なのは魂の格。そして、それは即ち魂には神に拮抗するだけの力があることに他ならない」

「銃殺姫 はそれが他の三人に比べて強かった。そして、その要因を持って総合的に 銃殺姫 の強さは他の 殺戮姫 に劣らない程になっているって事だ」

「実に興味深いな。しかし、それよりも興味深い事が二つある」

「聞いてやるよ。今のところ暇だからな」

男は言いたい事を口に出そうとして、言いよどんだ。それはおろか、より一層険しい眼光で先程の戦場を見つめ出す。

「おい、なんだよ」

「いや、彼のことだ」

男の瞳に映るのは、かの天才ヴィンセント・フィッツモーリス。男は当然ヴィンセントの事を知りもしない。だが、直感で感じとっていた事がある。

「あれが……っ！」

「見えたかな。彼はこちらを見ている」

「見えてるのか？」

「恐らくだが視覚としては見えていない。只なんとなく見ているのだろう。何かがそこにあるんだと分かってな」

「第六感か、ここまで強力な奴は珍しいな」

第六感。勘と訳すべき、ある意味究極の技能。それを会得した物は早々死なず、あらゆる物事に早々負けることはないと言う。彼はそれを間違いない使いこなしている。

「彼は気に食わない」

男が突然呟いた。男はヴィンセントの人となりは一切知らない。その思想も、その信念も、その矜持も――だが、直感する。相手の存在を認めない次元まで相手を否定したい感情が込み上げてくる。「理解できたよ。もしも、私の計画が頓挫してしまう事があれば、それは間違いない彼の仕業だろう」

「そういうや、お前も」それ”使えるんだったな”

「第六感か。ここまでくれば未来予知とでも言い換えられそうなものだな」

それは神の御技とも呼べる所業だろう。なぜならば、大抵の事は勘だけで片がつく。それは余りにも簡単すぎて――

「実にくだらない。神にでもなった気分と言うのが尚更腹が立つ」

「それで、もう一つは」

「それが、それは君の事だよ。正確に言えば、君たちのだ」

「確かに、お前はどう思っているんだ。ジェイムス・オブライエン博士、またの名を 天才生物学士」

「それを君の口から聞かせてもらえないだろうか、もう一人の 斬殺姫」

「ふふ」

少女が笑う。月下に照らされて黄金に光る髪を揺らしながら、セザリオと死闘を繰り広げた 斬殺姫 と同じ顔を持つ少女がそこに立っていた。服装も、声も、顔も、肌の色も、全てが寸分狂いなく一致する。違うのは、髪形と口調だけ。

「簡単だ。あれ私は同じ物から生まれた同じ物。違いは少しだけ、あつちは人間の魂が宿り、こちらには神の魂が宿っただけさ」

彼女達に使われた神の死骸は他の者達と違い単一。故に神の魂が

宿る事が唯一あり得たのだ。

「比率は51：49。要するに同じ人間である事には変わらないんだよ」

「ならば、口調が荒っぽいのが君なのかなぜかな。君は神の魂が宿った方なのだろう。もう少し威厳があっても良いと思うのだが、如何せんそこらのチンピラと同じ口調なのは少々いただけないのだよ」

「それは分からねえよ。あくまで推測になるが、あっちの方はこっちが神として生まれる前よりも前に存在していたって事なんだろう」

人の話す言葉は月日と共に変わって行く。しかし、古い方が古風な新しい方がより現代的になるのは必須。しかも、神と言う存在はしゃべる事は滅多にない。喋り方の縛りが無い以上。人間の魂を基準にして新しい喋り方、より荒っぽい喋り方をするようになった。それが彼女が導き出した答えだった。

「なるほど、面白い。より興味が沸いたよ。神が存在するよりも速く生まれた人間、しかも何故魔術師がそのような物の遺伝子を見つけることが出来たのか、謎は尽きないな」

男も笑う。実に面白い。やはり、人生はこうでなくてはならない。面白さと越えるべき障害、ここが人生の正念場であると間違いない。断言できる。

「さあ、美しき 殺戮姫 の舞台。今夜より死の舞踏の始まりだ。^{ダンスマカブル}存分に戦いそして上れ、神を——その座から引きずり落とす為に」

幕間劇（後書き）

ちよつと嘘つきました。次からが話の本番に入っていきます。

記憶と物語の目覚め

夢を見る。

その夢の中に居るのは幼い頃の私。優しそうな両親に連れられて歩いていた。嬉しいのか、この世の悪意など知らないような無垢な笑みを浮かべている。そして、その様子を微笑ましそうに眺めている兄の姿。優しい日常、何所にでもある日常。だけれども、とても大切なもの。でも――

「わたしは知らなくちゃいけない」

ヴァイオラとしての記憶を思い出し、もう一度セザーリオとして生まれ変わらなくてはいけない。これはその為の通過儀礼。記憶を思い出し、自分と言う存在を思い出し、ヴァイオラと言う人間を葬り去る。なぜなら、私はまともな人間ではない事は明らかだ。

決意と共に疾走を開始する記憶の欠片。平和なありふれた日常。しかし、今必要なものはそれではない。

「大丈夫。私は大丈夫」

自らに言い聞かせて、辿り着く最後の記憶を受け入れるために自我を保つ。そして、自分に何が起きたのか、何をしてしまったのか、その全てを思い出せ。

何気ない日常的一幕。その日、私達の家族はどこかに出かけていた。場所は関係がない。そこで起こったことが重要なのだ。

起こった悲劇は暴力団の抗争か何かに巻き込まれた事。飛び交う銃弾。そして、気づいた時には両親は死んでいた。

怖い。恐ろしい。他人が死んだ。肉親が死んだ。それだけで世界が終わるような絶望感と恐怖。

だが、私は動く事が出来なかった。まるで、自分には死から逃れ

生き延びようとする全ての権利がなかったように。事実、私自身は逃げようとしていた。だが、動けないのだ。なぜなら、ヴァイオラ・アンシュッツは生まれながらの欠落者^{ラッカー}。本来人間に備わっている行動真理や思い、信仰、現象、感情が一部分だけ欠落した人間。つまり、ヴァイオラは死と相対した場合何も出来ず死んでしまう存在であつた。そのように設定されていた。

動けない。自分を庇うようにして兄が殺された。再び、襲い来る世界が終わるような絶望感と恐怖。だが、同時に湧き上がる疑問。

——他人が死んでこれだけの恐怖感を味わうのなら、自分が死ぬときの恐怖感はどう程の物だろうか？

——嫌だ。

嫌だ。死にたくない。生きたい。生きていたい。死ぬわけにはいかない。生き足掻け、何所までも何所までも——

しかし、思いは届かない。なぜなら、ヴァイオラにはその行動の権利を剥奪されている。基盤にそれがない以上、どうすることも出来ない。そこが、埋まらない限り私はそれを『すること』が出来ないのだ。

生きたい。生きたい。どうやっても、何をしても、何を——捧げても。

そう念じた瞬間。天からの声が聞こえた気がした。だが、この世界に神などいない。神などいたら自分はこのような悲劇に会っていない。ならばその声はきつと——悪魔からの声なのだろう。

「お前は 欠落者、それを『する』事ができない。お前は 欠落者 それを『受ける』事が出来ない。ならば、ここで死ぬ？ 朽ちる？ その狂弾に殺められ？」

嫌だ。それは、嫌だ。その為ならば、何であろうとしてやろう。その為ならば、何であろうと捧げよう。だから、私は悪魔に願う。その叡智を私に授けて欲しい、と。

「ならば、知恵を貸そう。そして対価としてこの場の全ての血肉を贅に捧げて貰おう」

いけない事。これは、禁忌。しかし、自分はそれを受け入れる。

「ならば、楽しみ。この場でお目の描く最高の楽しみを舞え。それこそが、生き足掻く事が欠落している 欠落者 であるお前に残された一つの権利。『生き足掻く』為の唯一塞がっていない正道、一本道になつていよう。しかし、努々忘れるな。それはお前が元々持っていた歪みであり、お前の正道。悪魔も神も親も人生も記憶も経験も、一切関係のないおまえ自身の業なのだ」

その当時は悪魔の言い分を理解できていなかった。今でもそうだし、しかし、その時私は無意識の内に選び取った。生きるため、殺戮と言う道を――。

瞬間に意識が入れ替わる。本能で行動を起こす機械と作り変わっていった。

交差する無数の銃弾と銃声。これが家族を殺した。だから、これは恐ろしいものだ。そう、本能が学習する。

そして掴み取ったのは皮肉にも家族の命を奪った銃。そして、幸福か不幸か私には銃を操る才能があった。

銃を撃っていた。銃をこちらに向けてきた。あの男は私を殺すのだ。そう、理解した。だから、放つ。相手より速く、相手が打つよりも速く、正確に一撃で仕留めていく。そして、気がついたときには全ての人間が死んでいた。

「贅は頂いた。ならば、少女よ私は去ろう。お前にこそ我が力を扱うに相応しい。いつか、いつか来るその日を夢見て、我は汝に感謝しよう」

現れた悪魔。漆黒の黒い狼に跨り、その体躯は天使、頭は鳥で、手に鋭利な剣を持つ不吉な悪魔。しかし、不思議と恐ろしさは感じない。むしろ、親近感を覚えていた。

「我が名は『アンドラス』。不和を齎^{もたら}す殺戮の悪魔なり」

それが、私がまともに思考していた最後の瞬間。その次の瞬間には精神が壊れて、まともな思考は出来なくなっていた。

既に精神は壊れ、ただ恐怖するものを殺すだけの機械と成り下がった私は、何の目的も持たず街を徘徊する。

そこからの記憶は曖昧だった。銃に恐怖を覚えていた私は、それを持つ人間を殺戮していたのかも知れない。ただ、確実に言える事が一つだけあった。殺戮人形となつてからの私が知っている恐怖の対象は銃以外ない。つまり、ヴァイオラ・アンシユタツツは、ここにも居るような通り魔のナイフで呆気なく最後を迎えたのだった。

落ちていた私の意識は、記憶を取り戻したと同時に覚醒していった。

「ここは……」

自分が寝ているベッド以外に何もない部屋だった。それもその筈、ここはヴィンセントが用意した私の部屋だ。まだ、一週間足らずで私物もなく、ただベットが置いてあるだけの部屋。元は来客用として使われてたが、ここに寝泊りするのはアルウィーン以外に居らず、セザーリオの私室となった。ただ、難点があるとすれば今もアルウィーンが使っている事だろう。

「おはよう、セザーリオ。随分、暴れまわったそうね、お姉さん驚いたわ」

「アルウィーンさん」

声の持ち主に目を向ける。そこに居たのはアルウィーンだった。

黒く分厚いコートを羽織っている所を見るとどうやら外に出てたらしい。アルウィーンは、外出時にいつもそのコートを羽織るので分かりやすい。

「まったく、ヴィンセントには困ったものよね。あいつ私を連れくるや、セザーリオが腹を大剣でぶつ刺されたから看病してくれて、強引にも程があるわよ」

「すみません迷惑かけてしまつて」

「気にしないでいいのよ。全部ヴィンセントの所為でしょうから。アイツのバカ騒ぎに巻き込まれたのは災難だったわね」

それは違う。巻き込んだの私の方だ。

「それは——」

否定しようと声を上げるが、アルウィーンは立ち上がり部屋を出て行くところだった。

「何か言つた？ 私は三日三晩ずーつと研究所に引きこもっているヴィンセントの奴引つ張り出してくるから、ちよつと待つてつてね」
ドアが閉まる音。同時に部屋の中の音は全て消えた。ここに居るのは自分一人だけという事が一層強くなって——少し寂しい気がした。

「あの後、自分は——」

思い返そうとするのは、あの夜の事。襲つてきた私と同じ年くらいの金髪の襲撃者はどうなったのか。最後に一撃を入れた記憶はあるが、その後の記憶がない。それに、少女の目的も不明のままだ。ただ、言える事がある。あの少女の目的は私だった。後半はどうか分からないが、少なくとも最初に会った時見た彼女の瞳が憎悪を映し出していたのは間違いない。

「迷惑をかけるのは嫌だ」

もう、迷惑はかけられない。ヴィンセントはここで自分などに構うべき人間ではない。本物の天才、その言葉そのものを体現した人間。それがヴィンセント。だから、私は邪魔になるだけだ。

ただ、それはあくまで建前であって、本当の理由は自分が理由で誰かがなくなるのを見たくないからだ。自分は間違いなく一部たりともヴィンセントを心配していない。やはり、自分は利己的な人間だと思う。それも記憶を取り戻してからは顕著に現れている。

「よし、大丈夫」

一人でも我慢できる。もう、自分は十分大人だから、孤独も耐えられる。

「ガキが何かっこつけてやがる。お前は黙って俺に着いてくればいいんだよ」

振り返る。ドアを開けたその先にいたのはヴィンセントだった。

「でも、自分が居れば迷惑をかけます」

「それこそ勘違いしてやがる。俺が負ける訳がないだろうし、これは俺にとってもチャンスだ」

絶対的な確信を持って言い切る彼は、本当に心の底からそう思っているのだろう。その態度にセザーリオは呆れてしまう。だから、少し抵抗しなくなった。

「でも、あの時の襲撃者を倒したのは自分ですよね？」

「そりゃ、お前が横取りしただけだろ。しかも俺の助けがなかったら死んでたぞお前」

「それは……」

「その程度でここから出て行くか？ 言ってやるよ、すぐ殺されるぞ」

「……」

「殺人姫 毒殺姫 吸血姫 斬殺姫 」

ヴィンセントが口に出した単語。その全てにセザーリオは聞き覚えがなかった。

「今、お前を狙っている連中の名前だ。 斬殺姫 ってのは襲ってきた奴な」

「だったら、なおさら自分は——」

「その分だと知らないってか。だとすると困るな、俺の予定が狂っ

ちまう」

ブツブツと独り言を呟くヴィンセント。この行動をセザーリオも見たことがあるので知っていた。こうなると、ヴィンセントは人の話をまるで聞かない。そして、必ず厄介な事に突拍子もないことを言い出すのだ。

「やっぱり、コイツを使って呼び起こすしかないか」

何を？ 決まっている。 殺人姫 毒殺姫 吸血姫 斬殺

姫、そして――

「ヴィンセントは何を知ってるんですか？」

「今、この街周辺で起こっていること。お前のこと。そして、これからどうなるか。聞きたいのなら教えてやる。でもな、どの道俺が一人で決着つけるつもりだ。お前が何しようとか俺のしたいことは変わらない。それと一つ忠告しといてやる」

ヴィンセントははつきと言い切る。

「ヴァイオラ・アンシュッツ。これを聞いたらお前は後には引けないぞ」

セザーリオはヴィンセントが自分の本当の名前を言い当てたのは驚いた。しかし、彼は何が起きているのかその全てを知っているのだから、答えてもおかしくないのかもしれない。

「それでも、自分には聞く以外の選択肢はありません」

セザーリオも言い切る。立ち向かわなければ勝ち取れない。ならば、戦う以外の選択肢はありえないのだ。

「それ、私も聞きたいんだけど」

そしてもう一人。廊下の方からアルウィーンが現れた。

「正直言うとな。アンタに三日近くつき合わされたんだから、何の報酬もなければ釣合わないでしょ。私、そんなに安い女じゃないわ」
「別にそこらに生えてる草で物々交換できるくらいの価値だろ」

「アンタって奴は本当に――」

アルウィーンが拳を作りワナワナと震わしている。それをヴィンセントは軽く流し、セザーリオの居る部屋に入ってしまった。

「分かったよ。聞きたきや勝手に聞いてろ」

「今日はいつもより素直ね」

「こっちは早く喋りたいんだ。邪魔するのならどっか行つてろ」

記憶と物語の目覚め（後書き）

設定

欠落者^{ラッカー} について

たまに生まれる欠陥人間みたいに思ってください。簡単に言うと、魂と肉体の回路の一部が接触不良で、何かをしようとした時に『行動』に繋がられない人間の事です。しかし、欠陥があると言っても本当にピンポイントなのでこの症状を持っている人間でも余り実感できない場合が多いです。例えば、野球で初球にバットを振れないとかそんな超限定的な物です。ただ、セザーリオは誰かに殺される時に生き残るという行動に繋がられない人間なので比較的に重いほうです。と言っても現実社会で真正面から殺される機会に会わないし、あつたとしても大抵逃げられないのでやはり軽めです。この症状は基本的に治る事ありません。しかし、特殊な方法で代用する事が出来ます。ただ、これには魂の質が必要なのでやはり通常は治りません。

例外としては、セザーリオが殺されかけても何もしないで八割の確立でセザーリオが死なない場合は普通に動けます。逆を言えば、死に直結する殺害行為の場合は動けません。と言っても、そこは主人公。コイツだけの特殊な例が存在します。まあ、才能なのか単なる不幸なのかは本編で確かめてください。

アンドラスについて

簡単に言うと悪魔です。特性としては非常に厄介なのですが、セザーリオとの相性は一応ネタバレっぽくなるので伏せておきます。

回想と覚悟

セザーリオが崩れるように倒れた。恐らく血が足りなくなったのだろう。そもそもこの状態で戦っていたことがおかしいのだ。

「セザーリオ、大丈夫か？」

ヴィンセントが近づき、その様態を見る。

「やはり傷が塞がっている、か」

大剣で串刺しにされた筈の腹部。しかし、残るのは大量の血液と塞がった傷跡だった。高速回復能力ではなく、再生と言っている程度の修復を見せていた。

「治癒ってレベルじゃない。再生しているな。しかも、この感覚。間違いない。法則の変化、自分の都合のいいルールを創ってやがる。となるとやっぱりコイツは『神の法則』を使えるってことか」

ヴィンセントの背後で何かが動き出した。そうだ、ヴァイオラが傷口を再生するように、同格の存在である彼女も再生できないはずがない。

「アナタね。普通じゃないわよ。そんなもの感覚で分かる人間、勘で言っていようとまず居ない。いや、どうしてその単語を知ってるの？」

立ち上がる金色の髪の少女。大剣を杖代わりにしてバランスを取りながらヴィンセントへの方を向いていた。

片目から血が流れていた。セザーリオの放った最後の弾丸がちょうど目を貫いたのだろう。ただ、脳に直接振動を加えられた事によってだいぶ感覚器官がやられているらしい。見るからにフラフラで足元がおぼつかないでいた。

「小娘、教えといてやる。普段俺たちみたいな人種が勘って思っている奴は実は二種類だ。本当の勘と第六感的な運でもない確かにそこにあるものを感じてる」

ヴィンセントの語りは少女が求めていた物とはずれていた。

「つまり、知っているから分かる物のと知らずして分かる物だ。本当の第六感つてのは、文字通りの反則なんだよ」

本当の第六感と呼べる物はあらゆる情報から推測できない確立を掴む力に他ならない。瞳に映る決意は言葉を読み取るのは、純粹な第六感とは違う。相手の筋肉の動きを見て、行動を予見するのとは違う。まして、世界の法則の変化に感覚器官がどの様に感じるのか知っているから、それが起こるのを予想できるのとは違う。

「それで？　それが、私に何か関係があるの？」

知っていたから分かったという返答だと理解した少女は苛立ちながらも、やはりこの男が何を言っているのか分からないといった様子で聞き返す。

「お前はその区別がつけることが出来ればもう一段階上に上げれると思つてな。ちよつとした礼だ。お前のおかげで目が覚めた」

先程、対峙した時はつきりと感じた絶望感。絶対勝てないと感じてしまう気迫と実力。それらをヴィンセントは初めて少女から感じた。今まで生きてきて格上に一度も会った事がない故にその実体を掴み損ねていたが、対峙した時に本当の強者という存在がはつきりと理解できたのだ。

それがどんな物か分かった。それが、その存在よりも上に至るにはどの程度の実力が必要か、それを通り越すにはどれ程の実力が必要かが把握できた。

だからこそ、ヴィンセントは余裕であった。

なぜなら、それを超越する立ち位置まで自分を持つてくればいい。そして、その位置まで自分を高めるのに一切限界を感じない。

数秒による意識の変化による実力の上昇でもう既にヴィンセントは間違いな少女よりも強者だ。それ故に義理であり対等な立場からの助言。それが今の言葉だった。

「アナタ何がしたいの？」

曲がりなりにも少女は殺すつもりで襲いかかってきた敵。ならば、

なぜその様な不利益にしなければならないことを言い出すのかと訝しむ様に少女は答えた。

「別に。そう思ったただけだ。後、勘違いしているようだから言つてやる。今の俺はもうお前よりも強い。今からお前がどれだけ強くなるうとそれは揺るがないんだよ」

「ふふ、あははははつ、本当に面白しろいわね。その自信に満ち溢れた表情が滑稽で堪らないわ。私より強い？ 馬鹿みたいなこと言い出さないで」

響き渡る少女の声。腹を抱えて笑う姿は、先程の言葉をまるで信じず笑い話が勘違いだと思つてに違いない。しかし、ヴィンセントは違う。それを証明する様に怒気を強めていく。

「それよりも聞きたい事がある」

僅かに震えが混じる。周囲を威圧するような意思がその声から微かに感じられる。

「聞きたい事？ いいわ、答えてあげる。一応私を出し抜いたご褒美つてとこかしら」

「御託はいい。答えるー！」

その時、ヴィンセントの気配が大きく変わった。あらゆる物に対しても常に余裕をもって挑み、悉く乗り越える彼にとっては似つかわしくない。あふれ出す感情は純粋な怒り。今度こそ周囲が張り詰め、無意識に少女が息を飲む。

「コイツの体とお前の体。誰がどういう目的でこうなった。いや、この馬鹿げたことを仕出かした奴は誰だ。答えるー！」

ヴィンセントが振り返り、少女を見る。その怒りの表情を見た少女は咄嗟に大剣を構えた。

「どうして……」

誰にも聞かれないほど小さな声で、少女が呟いた。

何故、構える必要がある。相手は丸腰だ。にも関わらず、自分はこの相手を警戒している。目の前に居る男が、別人のように思える。しかし、ここで負けを認めるのは少女の性格からしてありえない。

だから、彼女は気丈に振舞う。

「教えて欲しいの？ だったら、あれが一番詳しくて分かりやすいわね」

少女が取り出し物はセザーリオが唯一持っていたあの《機構》だった。

「コレをその子は持っていなかった？」

「ああ、もっていた。記憶がなくなっていたから、何なのか知らない様子だったかな」

「やっぱりね。コレはその子の血液を媒介にして施錠が外れるわ。そして、そこに全てが記してある」

「鍵はやっぱり血液だったか。そこまでは解析できたんだが、明らかに必要なのが人間の血液じゃなくてな。もしかしたら、フェイクかも知れないと疑ってた。これは一本取られたな。もっともそろそろ試してみるつもりだったが」

「アナタは……」

目も前の男の力量が分からない。底が窺い知れない。そして、一番気に掛かる点があるとすれば、似ている。性格でも容姿でもない。魂の形が似すぎている。この盛大に鬱陶しい計画を立ててくれたあの男に。

「お前、そこでちょっと待ってろ」

「はあ？」

突然、ヴィンセントは下の階に行く階段のほうへ行ってしまった。突拍子過ぎて訳が分からないと言った様子で少女はそれを静観していた。

「さっきまで殺し合いをしていた二人を置いて何所かに行くって、まったく何考えているのかしら？ ねえ、アナタもそう思うでしょう？」

少女は意識を失っているヴァイオラに優しく問いかけた。先程の憎悪を燃やしていた姿とは大違いだ。

「言っても無駄か、それにしてもアナタも頑張るわね。私にここま

でも傷を負わせるなんて、一步間違えれば私の方が死んでいたし」

そうだ。当たり所が悪ければ、少女が眉間を打ち抜かれ死んでいないに違いない。ギリギリ回避して打ち抜かれたのは右目だった。銃弾は脳の貫通を回避したので死ぬ事はない。だが――

「右目が見えない。魂と霊格を完全に殺されたか……」

少女が殺そうとしたヴァイオラの身体に宿る何か、少女は殺しきっているつもりでいたが、残る僅かな残滓を一発の銃弾に変換し放った。残滓といえど流石は死を司る神。撃たれた右目は長い時間を掛ければ再生できるだろう。しかし、少なくとも一月以上は治らない。

つまり、これからの戦いに間に合わないことになり、大きな痛手を負わされたことになる。

再び屋上のドアが開く。ヴィンセントは手に箱を持ったままは少女に近づいていった。

「何？」

「お前に怪我さしたコイツ。俺が今保護者やってるんだよ」

「だから、何なの？」

理解できない。何がしたいのかが、分からない。仕返す復讐する。それなら分かる。でも、この男はそんなことを微塵も考えていない。

「あのな、ガキの喧嘩の責任を取るのは保護者の役割って常識だろ。つーわけで、そいつを治すことは出来ないがコイツを着けている。後はこれで手を引けて事でもあるからな。もっとも殺し合いがしたいんなら、今からでも受けて立つぞ」

ヴィンセントが差し出したのは眼帯だった。

「騙されたと思って着けて見ろ」

有無を言わさない態度で迫るヴィンセントに渋々少女は眼帯を手にとった。

「これ……」

これが何なのか理解できる。言うなれば魔術装飾。しかし、決定的に違っているのは誰にでも操れるという点で大きく違う。少女はすぐさま好奇心に駆られ、眼帯を装着した。

「すごい。はは、確かに——」

この眼帯を着けると同時に変わった世界。男の視線に含まれる意思と感情が感じられる。風の声、大気の声、鉄の声、五感で感じられないが確かにそこに存在する感覚。そうだ、私はこれをいつも感じていた。でも、理解しきれていなかった。

これが勘とは言いがたい意思の感覚。自覚する事でそれを今までよりも鮮明に読み取れる。

なるほど、納得だ。この男に勝てる人間は早々居ない。

渡された眼帯は魔術を使ったわけではなく、世界を騙して異常を作り出している。それは間違いなく、世界のシステムを完全に理解しているからこそ出来る芸当だ。つまり、男はほぼ完全に神の領域に足を掛けている。

「その分だと、成功か。俺には必要ないからな。そいつは一週間辺りで使い物にならなくなる。まっ、その頃には着けなくても見えるようになつてるだろう」

これで私はもう一段強くなれる。アイツにも勝てるかもしれない。「感謝しとくわ。だから、アナタの言うとおり今夜は見逃してあげる。後、その子も邪魔をしないのなら生かしておいても良いわよ」完全に再生し、体力も十分回復した少女は二本の大剣を担ぎ上げた。

「私は 斬殺姫 ルーリア・ナート宜しくね。天才さん」

そうして、ルーリアは屋上から飛び去った。

「俺もコイツを運ばなくちゃな」

ヴィンセントは、ほぼ完治したセザーリオを担ぎ上げた。

その瞬間、何かが背筋を駆け抜ける。無論、セザーリオを担ぎ上げた事が原因ではない。

「こいつは——なんだ」

背筋に這いよる不快な感覚。振り向くが少なくとも数百メートル圏内にはこちらを見ている人間は居ない。しかし、だれかがこちらを観察しているような視線を感じる。

「気持ちが悪い。吐き気がする」

なぜだかこの視線の持ち主が気に食わない。ありえないほどの不快感が感じられる。コイツは敵だと憎しみに似た感情が溢れかえってくる。

別段、だれから見られようと構わないとヴィンセントは思っているが、この相手だけは素直に死んで欲しい感じていた。

しかし、視線の主もこちらに対して行動を起こす様子もなく、ヴィンセントはそのまま研究所の中に入ってしまった。

襲撃者が去ってから数時間後の研究所。

その二階の一室にヴィンセントは居た。言われたとおりにセザーリオの血を例の《機構》モドキにつける。《機構》は一切反応しなかったが、その隣には当然の様に一冊の本が現れた。十ページに満たない薄い本。恐らく何らかの方法で復元した物だろう。

ヴィンセントはすぐさま本を読み始めた。一ページを捲る速さで理解し、パラパラと捲りながら記憶していく。そして、表情は好奇心から不快感へと徐々に移り変わっていき、本を読み終えた最後吹っ切れた様に笑い始めた。

「はははははははははっ！！　こりゃあ、面白い。傑作すぎるぞ、ジャエイムス・オブラエン。なんだ？　俺への挑戦状か何かか？」

本を閉じながら、ヴィンセント・フィッツモーリスが盛大に笑う。書いてある内容、やり遂げようとしている計画、その根底にある思想。その全てが腹立たしくて堪らない。間違いなく自分の敵だと認識できる。

「人を超人にして神を越えるだと。馬鹿にしているのかコイツは人

間を——まったく本当に反吐が出る」

そこに記してあったのはジャイムス・オブライエンがもう一人の
斬殺姫 に語った事だった。実験の詳細にこれまでの経緯、そして
彼女達が何をしなければならぬのか——

~~~~ジャイムス・オブラエンが残した記述の一部~~~~

常々、私が思っていた事がある。人間の進化の先、その最果ては  
何所だろうか？

勿論決まっている。神だ。

この世界を創り上げた神。世界の秩序を創った神。あらゆる神話  
の元となったオリジナルの神。それを超えてみせる。それが私の彼  
岸であり、宿願だった。

そして、君たちは選ばれた。神を超えるため、まずは神の座に着  
くために。 殺人姫 毒殺姫 吸血姫 斬殺姫 銃殺姫、  
自分自身がどれに当てはまるかは君達も分かるだろう。

蘇った君たちの身体には神話上の神の死骸が使われている。その  
肉体と強靱な妄執が生み出す高純な魂をもって神となるためだ。そ  
して、私の見たてでは、少なくとも二人分の魂を奪い取れば神の座  
に至る資格が得れるだろう。

期限は二ヶ月。それ以上は君たちの体が持たない。それを回避す  
る方法はただ一つ。神になり肉体と魂の差を限り無く減らす事のみ  
だ。

さあ、駆け上がりたまえ。人が進む進化の通路、神へ至る道、  
神の道 ロード をその全てをもって超越しろ。

「ざつとこんなもんだな。記述に関してはまだまだ掘り下げられるが、専門的な話で聞いた所で意味が無い。お前等頭悪いからな」

「アンタも大概だと私は思うけど」

ヴィンセントが、二人の顔を見渡し――

「怖気づいたか？」

アルウィーンはその問いを嘲笑し、大げさな身振りで否定した。

「てか、私関係ないし。セザーリオもアンタみたいな見てるから大丈夫よね。違う？」

「えっと」

セザーリオは、突然振られた会話について気まずそうな顔をしている。

「取り合えずだ。俺の根本的な主張とアホやかそうとしているコイツの主張が決定的に食い違っている。そして、俺は他人の主張を認めるなんてありえない。だから、コイツを見つけ出して」

「見つけ出してどうするんですか？」

「会ってから決めるしかないだろう。まあ、気に食わなかったら殺す」

ヴィンセントの理屈の通ってない自分理論の主張にアルウィーンが呆れて呟いた。

「アンタね。そんなんだから、大学で問題起こして逃げざる終えなくなるのよ。まあ、どっちにしろアンタは誰にも理解されなくて、ここに来たとも思っけど」

「だったら言うな」

「はいはい」

再び沈黙が訪れる。

ヴィンセントは既に自分の意見を述べている。アルウィーンにいたっては元々部外者だ。つまり、この場で意見を言わねばならないのはセザーリオ。それを理解したセザーリオは、慎重に考える。

自分を狙っている敵の存在。そして、自分の寿命。後者にいたっ

ては、ヴィンセントに頼み込めば何とかなるかもしれない。しかし、敵についてはどうしようもないだろう。もしかしたら、狙ってこないかもしれない。しかし、そんな都合よく事が運ぶとは到底思えない。

「自分を狙ってくるんですね？」

「そうだ」

戦いたくない。当たり前な感情だ。まして、人の死の怖さを知っているが故に殺したくない。なぜなら、殺人は死をより近づけるからだ。しかし、戦わなければ問答無用で死ぬ。こちらが行動しなくても死ぬ。

と、考えるのが真つ当だろう。だが、しつくりこない。なぜか、それは何かが変だと本能が告げてくる。ただ、それでも本本当だと思える事があるとするならば――

「もう、殺されたくない。生きていたい。だから、自分は」

これを言えばもう引き返せない。だが、流されるのではなく、意思をもって一步を踏み出す。

「殺します。神なんかに興味はありません、でも闘わないと。だって死にたくないから。だから、闘います。何とか生き抜いて、生きていたなら後悔はいつでも出来ますから」

「へえ、やる気だな」

セザーリオの気配はいつもより堂々としていた。セザーリオは普段からこのような態度を取る事はない。殆どが流されている事が多い。記憶の欠落という要因もあつたかもしれないが、ようやくここに来て地に足が着いたようだ。

ヴィンセントもその覚悟を賞賛し、いつもより上機嫌だった。

「だったら、協力してやるよ。利害は殆ど一致してんだ。」

「はい！」

セザーリオは純粹に嬉しさを感じていた。ここに来てから一番だったかもしれない。世界に自分が立っている感覚。集団として家族の中にいるような感覚。その小さな世界であるが、そこに自分が存

在しているという事が何よりも嬉しかった。

「さっそく調査を始めていくぞ。待つてるだけじゃ始まらない。基本的にこつちから先手を取って攻める」

「それは良いけど。アンタさ、どいつから狙うわけ？ ルーリアちゃんは今所の無害っぽいけど、他の三人はどれくらい強いのか分からないし」

「不幸か偶然か、この街には怪奇殺人が横行しているだろ。そこから考えていくと簡単に答えは出る。まず、最初に持っている情報を整理していく。セザーリオ思い出せ、ルーリアの奴はどういう状態だった？」

襲撃の時を思い出す。あの時のことはセザーリオも強烈な印象を受けていたので良く憶えていた。

「たぶん、誰かと戦ってきた後だと思います。服にいっぱい切り傷がありましたから」

そこでセザーリオは理解する。

「殺人姫」

そう消去法で簡単に判別できる。吸血でも毒殺でもない。斬殺の枠は既にルーリアが収まっている。ならば、刃を扱うだろうを考慮すると残るは 殺人姫 のみ。

「そうだ。そして、斬殺姫 の性格を考えれば間違いない。死ぬまで戦い続ける。つまり、負けたが殺されなかった。もしくは、相手を倒したかだ」

だが、この二つを判断する材料はもう見つかっている。

「だが、勝った奴が相手の魂を奪えて自分の物にできる以上、斬殺姫 が勝っていた場合二人分の魂を有している事になる。魂つてのは力の全てだ。それを完全に奪えるとなると単純に戦闘能力が二倍になる」

だが、セザーリオのスペックは元々低い。それと対戦して互角な奴が魂を二つ分持っているとは考えづらい。

「魂二つ分と言うには 斬殺姫 は弱すぎる。恐らくボコられて逃げてきたら放置されてきたか。要するに 殺人姫 が 斬殺姫 に勝ち越している以上、俺らが行き成りやるのは荷が重い」

「そうですね」

ルーリアは強い。先程の戦いでは、動きにかなりの違和感があった。つまりは、本調子とは言いがたいという事だ。ならば、ルーリアはあの時の数倍は強く、更に相対した敵はそれ以上。ただ、戦った相手の生死が分からないのがせめてもの救いだった。

「じゃあ、誰にするの？ 他に持っている情報は……… ああ、なるほどね」

「アルウィーンさん。どうかしましたか？」

そうだ。今、この街には毒物が大量に出回っている。つまり、尻尾を掴みやすく。情報も掴みやすい敵は誰か？

「今、薬を大量にばら撒いている奴が 毒殺姫 」

「ああ、タイミングも合っている」

納得する二人。それが、セザーリオは気に食わないようで――

「二人だけで納得しないでください」

「「拗ねるなよ」」

「拗ねてません！」

セザーリオは否定するが説得力は皆無だ。

「それでどうするんですか？」

その言葉も妙に刺々しい。

「それなら私、薬を売ってるとこ見つけたけど。そこから当たってみればいいんじゃない？」

「まあ、妥当だな。よし、じゃあさっそく明日から搜索するか」

「結局、自分は除け者扱いですか」

「お前、金やるから街の外にある店に行ってこい。お使いだ」

「結局、除け者じゃないですか！」

セザーリオの言葉に二人は顔を見合し、堪え切れなくて失笑。声を出して笑った。

「「拗ねるなよ」」

「拗ねてません！」

## 『街』の外

次の日、セザーリオはあの無法地帯の外に出ていた。ヴィンセントは逆に街の中心に用があり、珍しく二人は別行動を取っていた。

「そつえば、初めてですか」

街の外に出てのは研究所に着てから、三回と少なく。まして外に出た事すら片手で数えられるくらいだ。

「それにしても、ここには道の真ん中に人がいるんですね」

やはり、これが当たり前なのだろう。なぜなら、あの街では街路に浮浪者一人いないので、まともな感覚が麻痺してしまっていた様だ。

それにしてもあの街の非合法性と無法性は飛びぬけていると思う。よく考えればおかしいとしか言い様がない。道端の浮浪者が何振り構わず拉致されて売られていくような場所が存在し、かつ存続できるはずない。ヴィンセント曰く、実質統治しているのは一人の人間と考えれば良いらしい。飛び切り優秀な人間がいてその人が完璧に街を操作し外の街に厄介事を持ち込まない事と、奴隷を外に売り出すことや人体実験などで普通の場所では作られない利権を生む。利権をめぐる争いが起きないのは、街が実質仕切っているのが一人、つまり頭脳になるべき人間がその人以外には居ない。故に上手く利権を配分する事が用意できるそうだ。そのような条件の下であの街は回っているらしい。にわかに信じられない話だが。そうなっているならば、そうとしか納得できないのも事実である。

そのように思考をめぐらして歩いている時、視界にちょっと気になるものが移った。

「あれは」

数人の人間が争いを起こしているようだ。まず目に付くのは、明らかに使用人の格好をした少女。背は低く、歳は自分とそう変わり

ないだろう。そして、その少女を取り囲んでいる男が数名。こちらは、柄が悪く大よそ道徳的な教育を受けてないのか理解できないのか、いかにも素行が悪そうな集団だった。

助けるべきだろうか？ 確かに難癖付けられているのは間違いなく、このままいけばどこぞに売り飛ばされる事になるかもしれない。普通に考えれば、使用人をやっているような人間を誘拐しても足が着くと考えられそうな物だが、どうやらあの男達にそこまで考える事が出来ないらしい。

「普通の人間なら助けるのが普通——だから」

自分は今だ人間である。断じて人殺しではない。それを否定するために自分は少女に向かって歩き出した。

これは偽善？ それとも自己満足？ どちらにせよ、自分は自分のエゴで動いていたのは間違いなかった。

いかにも育ちの良くなさそうな男が、少女を取り囲んでいた。

「な、なんですか。私には急ぎの用事が——」

少女は男たちに対して気丈に振舞うが、数の所為かやはり心もとない。

「きゃッ！」

男の手が少女の腕を掴む。

「悪いな。まッ、つってもよー、やっぱり悪いと思ってないわけなんだが」

「ああ、ちよつと俺達を助けると思ってたな」

「離して下さい！」

少女は両手を大きく振って抜け出そうとするが、男たちの力の方が強く振りほどく事が出来ないでいた。

「上手くいけば、いいとこの家に拾ってもらえるかしんねえんだからよ」

「そうは言っても、まともに扱ってもらえる保障なんて殆どねえーんだけどな。くはははッ——」

「くっ！」

「無駄だつて、女のしかも子供が大の大人に勝てるかよ」

周囲の人間はこの騒動の中、何一つ行動を起こさなかった。まともな場所であるのなら、少女を助けようとする人間が少なからず居るだろう。しかし、この場所はイースト・エンドと隔離街との境界。そのような場所に善良な人間が通る事などないに等しい。

だからこそ少女は必死で抵抗する。しかし、その状況は男一人の力に勝てないにも関わらず、取り囲んでいる男は五人程と絶望的だった。

「その辺にしといた方が良くないですか」

一直線に歩いてきた一人の少年が男達を挑発する様な態度で啖呵を切る。

「良い歳した大人が誘拐ではした金稼ごうなんて、とーってもカッコイイですね」

勿論、それはセザーリオ本人であつた。

「オイ、小僧。お前、何が言いてえんだ？」

少女を掴んでいる恐らくリーダー格の男が、低い声で静かに聞いた。しかし、その声色には明らかな敵意が混じっている。だが、それはセザーリオの方も同じで、何時もの毒を吐く姿勢を大人数を相手にしても崩す事がない。

「悪い大人の見本ですね。ここまで行くと古代人が絶滅危惧種って感じ出すし。まあ、それなら速く豚箱っていう博物館に展示されても良いと思うんですけど」

「ほー、いつてくれるねえ。お前——殺してやるから死ねや」

セザーリオを殺そうとリーダー格の男が動き始める。当然、男の拘束は緩んだ。その一瞬の緩み。その間に男の腕は少女から切り離されていた。

「なに！？」

驚きは、先程の少年が男と少女の間合いに入っていた事だ。加えて、少々緩めていたとはいえ掴んでいる腕を容易く強引に離れた事もある。人間離れた脚力と力、それを持つセザーリオを男は一層険しい目つきで観察する。

「クソがッ！」

こぼれ出る悪態。それは、男に向けられている物。武骨な黒光りする暴力装置の銃口が引き起こした物に他ならない。

向けられる銃口。さらに感情のない鉄の塊にセザーリオの指がかけられる。トリガーを引けばそれで終わり。それが男をより震え上がらせる。

「フッ」

セザーリオの勝ち誇った笑み。敗者に慈悲を与えるように銃口は逸らされ、指がトリガーを引き、落ちた撃鉄は空気を鳴らした。

ただ、予想外な事にその音は余りに呆気なく。銃として微小と言っても良いくらいで、まるで中身が空の様に――

「次は外しません。引いてくだ――あれ？」

セザーリオが慌てて銃を点検する。真っ先に確かめるのは弾丸の残量。リボリバーを回転させ中を確認するが、ない。

「弾がない？」

止まっていた時が動き出した様にセザーリオは徐々に動揺し始めた。そして、余りにも拍子抜けな展開を見せられた男達も最初は行動停止していたが、その内徐々に動き出して。

「オイ、小僧。舐めた真似してくれたな」

威圧するように男達が一步、セザーリオと少女に近づく。

「お、大人げないですよ」

「だったら、お説教しなくちゃな。俺達は大人なんだからよう」

「へ、へー、頭の中空っぽで論理的に物事考えられないくせに頑張ってください」

あくまで態度を変えないセザーリオにリーダー格の男は笑い。懐に入った刃物を取り出す。質は悪く、刃こぼれも見られた。しかし、

そこには刃の部分は拭き取ってあるものの黒い血が付着し、その刃物が人手にかけた事が伝わってくる。

「何所に逃げようとしてんだ、小僧。まあ、確かに俺たち頭悪いかな言葉で説明なんか出来ないな。だから、その体に教えてやるよ。そんな危ない物向けたらこうなりますよってなあッ!!」

一斉に臨戦態勢を取る男達。

「こつちです!」

セザーリオはそれを瞬時に理解し、少女の手を取って走り始めた。  
「あつ」

最初は引つ張られるだけだった使用人の少女もすぐに状況を理解し、全速力で駆け出した。セザーリオは少女の全速力に合わせ、残った余裕を状況把握に努める。

振り返った先には、やはり先程の男たちが追いかけている姿が見える。その表情は怒り一色に変わり、必死の形相であった。

「次、右に曲がります!」

今だ知らない土地。道順など殆ど覚えていない状況。それらを考慮して考えると短期で決着を着けるのが妥当だろう。

「はあ、はあ、はあつ」

少女の方も呼吸が荒くなってきた。全力で走っているのだから仕方が無いが、ここで止まると全てが水の泡だ。

「次、曲がったら、そのまま一人で逃げ切ってください」

「はあ、はあ、あなたは」

「まあ、こう見えてもそこそこ強いですから」

そして、差し掛かる曲がり角。二人はそこに転がり込むように曲がるが、曲がり角から出てくる人がいた。当然、勢いよくぶつかってしまった。

セザーリオは何か少女が怪我をしないように少女と地面との間に滑り込む。しかし、ぶつかった相手は転んでしまっていた。

「だ、大丈夫ですか?」

セザーリオが慌てて確認するが、その人物は何事もなかったかの

ように立ち上がった。

「ああ、問題ないよ。ちょっと、ビックリしてしまっただけだね」  
「そうですか」

そこに立っていたのは、大人の女性だった。黒いコートを羽織っている姿は遠目からでは男に見えなくもない。それは、短くカットされている髪の毛の所為でもある。さらにコートには銀や銅の装飾物に白い線で書かれた紋様とかなり奇抜な服を着ていた。その所為で、間違いなく美人と呼ばれる人種だが、それがどうでも良くなるくらい不思議な印象を受けた。

「やっと追いついたぞ。小僧」

荒い呼吸をしているが、男達はまだまだ体力が残っているように見えた。セザーリオはそれを見て、少女に視線を移すが男たちよりも荒い息遣いで、どうやらすぐには走れそうにない。

完全に追い詰められた状況。どうやって、犠牲を抜きにして切り抜けられないようだ。セザーリオは男達に対して戦う決心をするが――。

「君達は追われているのかい？」

「ええ、そうです」

「もし、良かったら僕も協力しよう」

「え？」

突然の申し出に困惑するセザーリオ。

「まあ、無理強いはしないよ。でも、君一人でこの子を守るのは荷が重いだろう？」

そうだ。一人で切る抜けるのは難しい。猫の手も借りたいほどである。

「良いんですか？」

「勿論、僕は人助けに生きる人間だからね。頼まれたら、出来る限り協力したいんだ」

そんな、人助けを好き好んでする人を見た事も考えた事もなかったセザーリオは、一瞬呆けるが今は考えるべきではないと真剣な様

子に戻った。

「どうした。もう逃げないのか。なら——」

男が刃物を再び取り出す。

「すまないが、見たところ君達は『人攫い』なのかい」

「そうだったらなんだ。俺達は手っ取り早く金が欲しいんだ。そう考えれば、これは結構上手い商売なんだぜ」

「つまり、君たちが欲しいのはお金という事でいいのかな？」

「ああ、そうだ」

その言葉に女は納得し、満足し、一步を踏み出す。

「それならば、話は速い」

コートの内ポケットから、一つの札束を取り出した。

「君達はまだ犯罪者じゃない。勿論、僕を殺して金銭も強奪すれば、より多くのお金が貰えるだろうね。でも、僕はこのお金を無償で君達に上げる心算だ」

「はあ？」

「僕は人助けがしたいんだ。そして、君達はお金が欲しい。この子達は安全が欲しい。つまり」

それで、誰も損をしない。そして、今のこの状況では全員が得をする。

「だが、俺たちがお前を殺せば」

「確かに多くのお金が手に入るだろうね。でも、人を殺した君達は警察相手に一生怯えて暮らすのかい？ だから、僕はもう一度言うよ。君たちはまだ犯罪者じゃない。既に犯罪者であっても、僕達はそれを知らないから結果的に不利益はない。で、どうなんだい？」

そういう事。つまりは、何の危険を冒さずに金が手に入る。それをするか、危険を冒してまでも大金を手に入れるか、二つに一つ。

「いいぜ。その話に乗った」

「ありがとう、交渉成立だ。これでこの札束は君の物だよ」

女が持っていた札束を男達に投げた。札束は放物線を描きながら、男達の手収まった。

「じゃあな」

男達がセザーリオ達への興味が完全になくなったようで、元来た道へ引き返していった。

しかし、セザーリオは思う。

「あの人達中身を確認しなかったけどいいのかなあ」

だが、それでもこの女性は本当に人助けをしたいという気持ちが本物だと分かった。なぜなら、彼女にはそういう空気がある。自身がある。そして、なんともいえない魅力があった。人間としての立ち位置がはつきりし、軸を持っていていいる為、他人に有無を言わさぬ力が彼女からは溢れている。

それが、男達も無条件で信じ込ませた理由だろう。そして、それこそが自分の目指すべきのだと直感した。

「散々だったね」

「ありがとうございます」

セザーリオは助けてもらった女性に感謝を伝えたとすぐに視線を助けた少女に移した。少女の方もだいぶ息が落ち着いて、なんとか喋れるほどになっていた。

「そ、それよりも、私の方がお二方にご迷惑をかけたのですから、本当に謝らないといけないのは私なのです」

必死に謝罪を述べる謝罪をする少女。セザーリオは、自分が助けたり理由が余りにも身勝手だったことに後悔した。

「まあ、何事もなくてよかったですね」

自分は人間的思考道徳ができるのかと言う単なる実験の一環に、少女を助けた。そこには当然、少女がどうなってもどうとも思わない思考が存在する。直向に感謝を述べる少女に対してどうしても後ろめたい気持ちになってしまった。

「それでも、どうお礼をすれば良いのか」

「ですけど、助けたのは」

「ですが」

「まあ、二人ともそんな事では話は進まないと思うんだけどね」

「あ、貴方にも感謝して――」

「まあ、僕は人助けに生きる人間だからね。誰であろうと何振り構わず助けてしまっただ。たぶん、その少年もそういう人種なんじゃないかな」

セザーリオの心が針を刺されて様に痛む。自分はそうじゃない。自分はそうじゃないんだと叫びたくなる。

「人に感謝しこそすれ、お礼なんてしない方がいいと思うよ。本人が望んでいないからね。まあ、これは単なる僕の考えだけど。案外、僕みたいな人種にはそれなりに当て嵌まると思うんだ」

しかし、ここは話に乗っておいた方が特だと判断したセザーリオは、少女に対して心にもない事を言う。本当は、単に都合が言いだけだった。

「自分もお礼なんてしないでいいですよ。自分からやったことですから」

「うーん、分かりました。感謝はしていますが、お二方がそうおっしゃるのなら」

少女は納得しない様子であるが、恩人である二人からの要求を無視するわけにはいかずお礼をするのは諦めた。

「ですが、もし何か助けて欲しい事があるのなら、私に言っていたければ嬉しいのです」

しかし、どうも本人は完全に納得できなかったようで、このような形の妥協をする様だ。

「つと、自己紹介がまだでした。私は、ニーナ・キャンベルと言うものです。ここよりも少し遠くなのですが、ある屋敷の使用人をやらせていただいています」

「服装を見れば分かるんですけど。どうしてもこんな場所でも着ているんですか？」

「いえ、ちよっとお恥ずかしい話なんです、働かせていただく事になったのはつい先日の事で」

ニーナはスカートの裾を持ち上げ一回転してみせる。

「ちゃんと働いている姿を母に見てもらいたくてここまで来たのです。着替える間も惜しかったので、走ったんですけど。その所為であの人達にぶつかってしまつて」

「それは災難だったね。尤も君も不注意を直した方がいいと思うよ。この地域は他の場所より格段に治安が悪い」

「いつもは裏道を使つてああいう人達に会わないようにするのですが、今日は急いでいた物で本当にすみませんでした」

再び謝罪をするニーナ。しかし、今回はそれだけで留めた。

「それじゃあ、僕はこれで消えることにするよ。それでも忙しい身でね。なかなか、人助けつてのは無くならないんだ。だから、僕は行かなきゃ行けない」

踵を返し、彼女は予定していたルートを再び歩き始める。

「あ、あの、一応名前を――」

「カトリーヌ、ここではこの名前で通っている。じゃあ、今度こそさよならだ」

そういつて彼女は一度振り向き、それだけ言うつと道を進んでいった。

「面白い人ですね」

「そうです。あんな人、私見たことはありません」

カトリーヌがゆっくりと道を去つていくのを見送つた後、ニーナはセザーリオをじつと見つめ始めた。

「ずばり、貴方は迷子と言う奴ではないでしょうか？」

「そ、そんなことないですよ」

「本当ですか。だって、このまま先に進めば行き止まりですよ」

追われていたにも拘らずそんな場所に向かつたのであれば笑い話にしかない。つまり、それはこの周辺の地形を把握していない事。

「ええ、ですから私が道を案内させていただきます。屋敷での仕事

は丸一日休みますといっているので夜に帰れば大丈夫ですの」

セザーリオにもこれといって断る要素が見当たらず、目の前の少女に対する罪悪感はあるものの実にありがたい提案だった。

「分かりました。助かります」

「はい」

快活な声で二ーナは返した。しかし、すぐに気まずそうな顔に変わる。

「ですけど、家に戻らなくてはならないので一緒に来て貰うことになるんですが」

「大丈夫ですよ。自分の物を買う以外には用事はないので」

「そうですか。では、すぐそこなので着いて来て下さい」

時折、天気などの他愛のない話を話しを織り交ぜつつ、二人は目的地まで歩いていった。

「あの」

「何ですか？」

「そつえばまだ貴方のお名前を聞いていなかったの」

「そうでしたね。私の名前は――」

何だろ。浮かび上がる名前の全てが違う気がしてくる。地に足が着かず不安定なまま中に投げ出されている感覚。そんな中で僅かでも地に足が着いている場所があるとすれば。

「セザーリオです」

## 『街』の外（後書き）

だいぶ放置していたので、二か月ぶり更新。正直、別の作品を完結させてからこつちを本格的に進めていこうと思っているので、たぶん次の更新はかなり先になると予想。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3735q/>

---

銃殺姫

2011年4月18日00時10分発行